ISSN 0289-4130

研究紀要

第15号

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

研　究　紀　要

第 15 号

1999

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目　　次

［論文］

東釧路式系土器へのモノローグ……谷井　　彪（ 1）

埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（2）……福田　　聖（ 35）
— 周溝墓とは何かを探るための試み —

弥生・古墳時代と神仙（道教）思想……中村　倉司（ 73）

北陸系装飾器台の系譜についての小論……利根川章彦（101）
— いわゆる「特殊な器台」について —

武蔵寺谷廃寺の研究……昼間　孝志（117）
木戸　春夫
赤熊　浩一

武蔵寺谷廃寺の研究

昼間孝志・木戸春夫・赤熊浩一

要約　寺谷廃寺の創建期には、同紋異笵の素弁８葉蓮華紋軒丸瓦が三種類存在する。その作りや胎土には違いもみられ、生産地や時間的な差として捉えられる可能性もでてきた。軒平瓦はすべて三重弧紋で、胎土からは素弁軒丸瓦との組合せは難しく、後出の単弁10葉蓮華紋軒丸瓦と組合わさる可能性が高い。丸瓦は量的に少なく、全体の数％で、薄手と厚手がある。出土遺物の大半を占める平瓦にも薄手と厚手があり、叩き具は、各十種類余りの分類が可能になった。凸面の叩きは大小の正格子と斜格子に大別され、一部ハケ目や複数の格子叩きを併用することもある。古式と考えられる薄手の平瓦は細かい側面及び端面調整、凸面格子叩きのナデ消し、凹面の枠板をナデ及び削りによる調整することを大きな特徴とし、素弁軒丸瓦との組合せが考えられる。また瓦類の主な出土地点は、薄手の平瓦を主体とするＢ地点と厚手の平瓦を主体とするＡ地点に大きく分けられる。相対的にＢ地点の瓦類が古く、Ａ地点の瓦類が新しいことから寺院の堂塔を含む伽藍の造営が（一部堂塔の廃絶も含めて）次第にＢ地点からＡ地点にかけて広げられていったものと推定される。

はじめに

1980年代以降、埼玉県比企郡滑川町に存在した寺谷廃寺は、出土した素弁８葉蓮華紋軒丸瓦から７世紀前半に建立された東国で最も古い寺院の一つと考えられてきた。寺院の西側の平谷窯跡では道路工事の際に灰原とみられる付近から須恵器と瓦類が、東側の羽尾窯跡からも須恵器に混じって瓦が１点出土し、これらの窯で寺谷廃寺の屋瓦が焼成されたものと考えられてきた。特に両窯から出土した須恵器はこの寺院の年代的位置付けに大きく関わり、その後に寺谷廃寺に関する論文などが発表される際にも、素弁軒丸瓦の瓦当紋様とともに寺谷廃寺の年代の根拠になっていた。しかし、寺院跡周辺は羽尾窯跡を除いて未調査のため、実態は依然として不透明のままである。

今回発表する資料は、その後に寺谷廃寺で採集された瓦類の中から青木忠雄氏と高橋史朗氏の資料を中心に掲載したものである。両氏が採集した資料も含めて細片が多いが、整理対象資料は合わせて700点以上にも及ぶものであった。採集地点は第４図に示したように概ね青木氏はＢ地点、高橋氏はＡ地点で採集したものであるが、その瓦類は質においては相違がみられた。また、両氏が採集した瓦には型式的、製作技法的にも差があり、採集地点によって時期の異なる堂塔や瓦製作工人の存在も浮かび上がってきた。

前述したように寺谷廃寺は未調査のため建物規模、寺院地の範囲、瓦生産地など不確定要素を多く含んでいる。瓦生産にしても羽尾窯跡は調査によって須恵器窯であることが判明したが、平谷窯跡の３基と推定される窯跡は未調査のため須恵器窯であるか瓦窯であるか瓦陶兼業窯であるかも定かではない。今後寺院本体及び平谷窯跡を含めて何らかの発掘調査が行われ、寺谷廃寺の実態が一部でも明らかになることを切望するものであるが、今回の研究報告がその一助となれば幸いである。

1　寺谷廃寺の立地と環境

寺谷廃寺は、比企郡滑川町大字羽尾字寺谷に所在する。標高約65mの丘陵上に立地している。この丘陵は、滑川と市野川によって開析された比企丘陵の一部を成し、北西から南東方向にのびている。丘陵は、さらに滑川、市野川の支流によって開析され、小谷がいくつも形成されている。これらの谷頭には溜池があり、この周辺だけでも、その数はゆうに100を越える。これら溜池の起源は明瞭ではないが、渡来人によって開拓され古代から存在したものと考えられている。溜池による潅漑技術がどのようにしてこの地方にもたらされたのか、今後の周辺の調査が注目される。

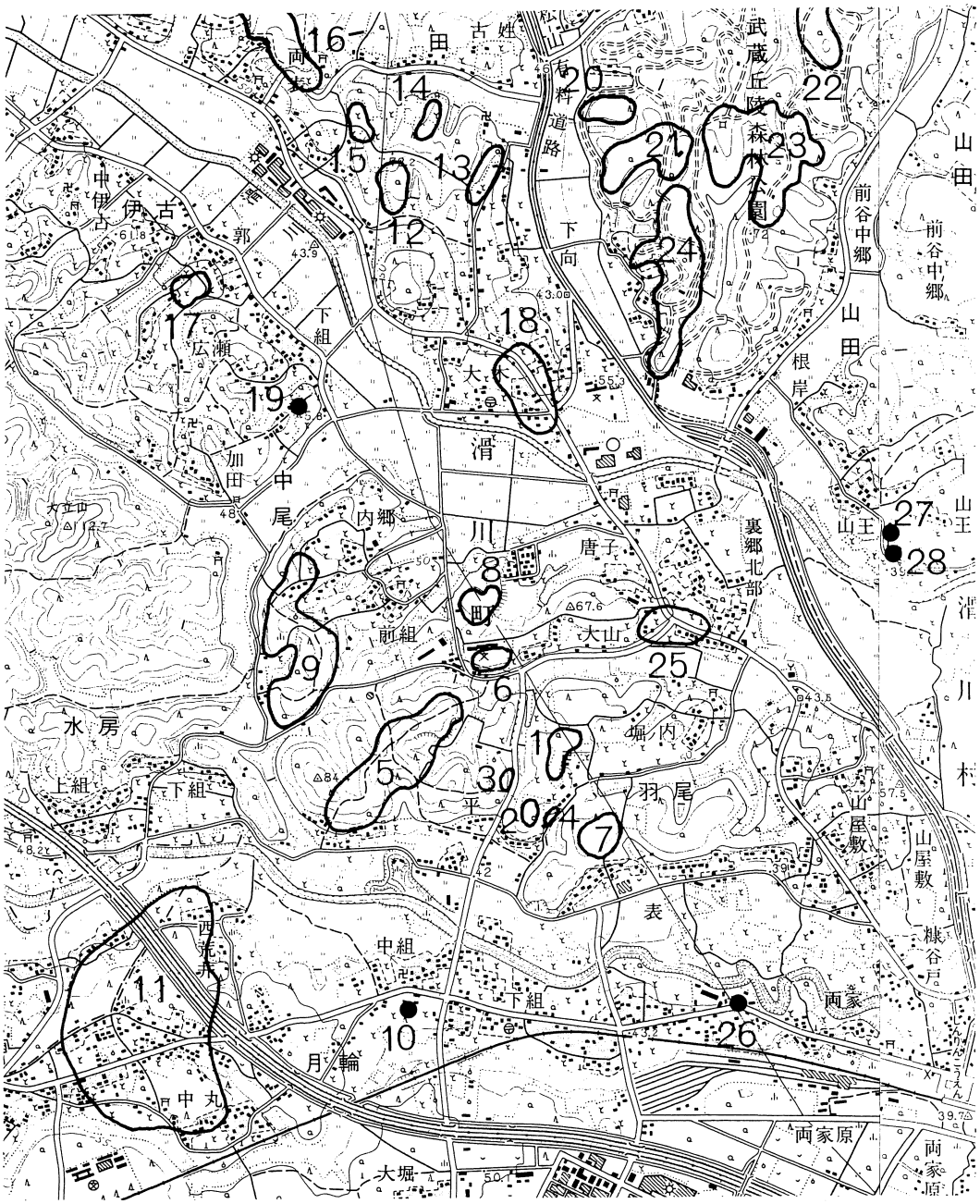
周辺には、古墳時代後期以降の遺跡が多数存在する。付近には平谷古墳群、唐子古墳群、月輪古墳群、平谷窯跡、羽尾窯跡などの６～７世紀代の遺跡が数多く存在する。これらの古墳群を造営した支配層と寺谷廃寺の造営とを結びつける有力な傍証は、現在のところ得られていない。

寺谷廃寺の立地する丘陵上は、主に桑畑などに利用され、丘陵下は水田となっている。丘陵は南北に伸びたやせ尾根状である。東西には狭い谷津が入り込んでいる。丘陵斜面はやや勾配がきついものの、丘陵上は狭いながらも比較的傾斜が緩く、平坦地であるのが特徴である。水田面との比高差は、15m～20mである。寺谷廃寺の発掘調査は行われていないため、その規模、遺構など具体的な内容は一切不明である。その存在については、古くから興長禅寺の周囲（第１図―A）から古瓦が出土することが知られており、この地に寺院が存在したものと推定されてきた。その後、興長禅寺の西側を通る道路工事の際に、平谷窯跡の灰原とみられる付近から須恵器と瓦が出土した（第２図）。出土した瓦は、寺谷廃寺出土瓦とよく似ており、平谷窯跡から寺谷廃寺へ供給されたと考えられている。

平谷窯跡は、寺谷廃寺と同一の丘陵にあり、小さな谷が入り込んだ西側の斜面に位置する。窯跡は丘陵東斜面に現在３基知られているが、付近には更に別の窯が存在する可能性もある。発掘調査が行われていないため、窯の性格についても詳細は不明である。灰原付近から出土したとされる瓦は、軒平瓦、丸瓦、平瓦である。軒平瓦は三重弧紋で顎部が剝離している。平瓦は叩き目のナデ消される瓦と、叩きのままの瓦に分けられる。また、厚さも薄手と厚手があり、胎土にも違いが見られる。一方、須恵器は、蓋、坏、高坏、提瓶、甕などが出土している。

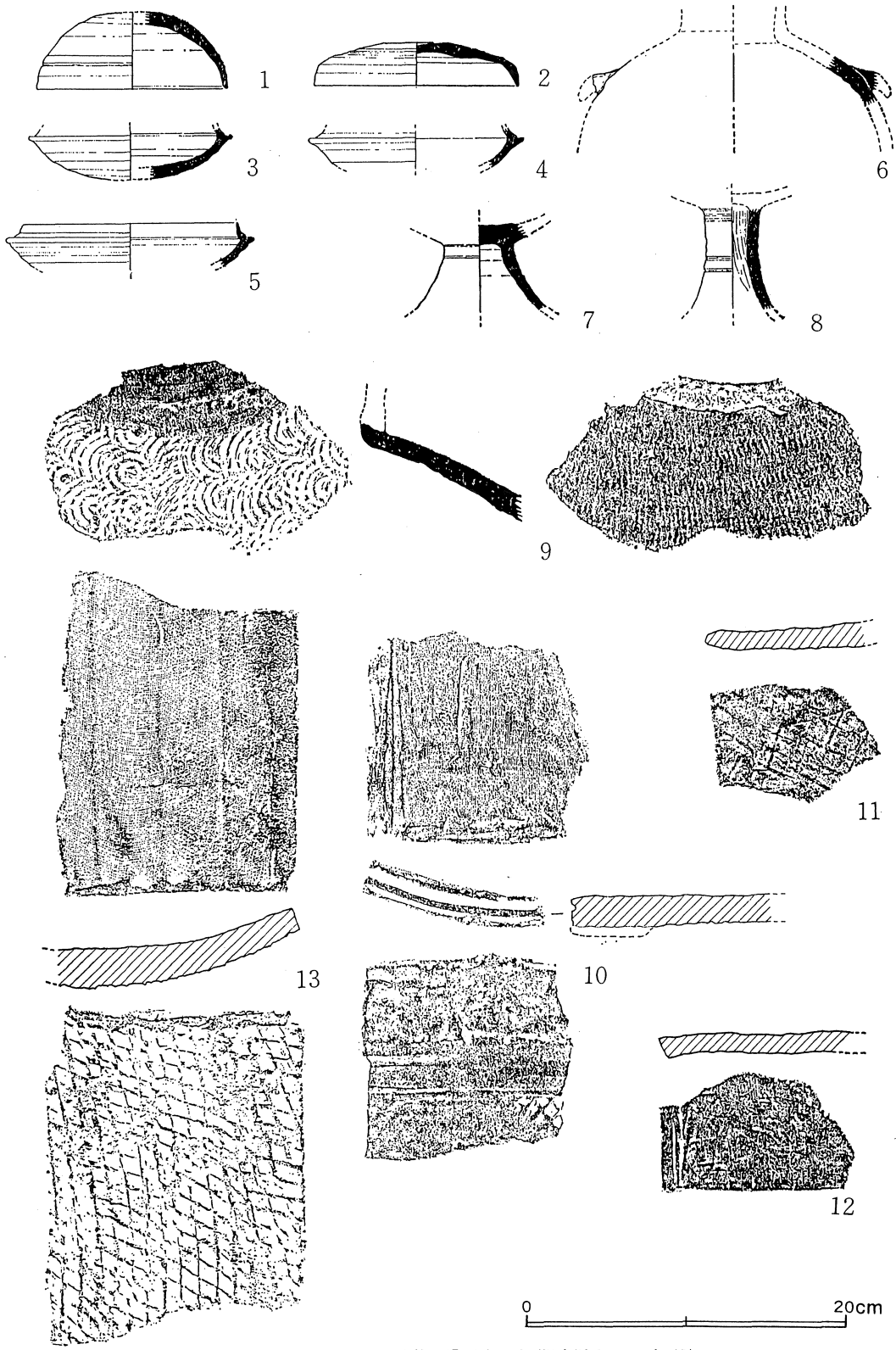
寺谷廃寺と同じ丘陵東斜面には、羽尾窯跡が存在する。羽尾窯跡は単独窯跡である可能性が高く、蓋、坏、高坏、短頸壺、平瓶、提瓶、台付壺、すり鉢、甕を焼成する。羽尾窯跡と平谷窯跡の須恵器は器種構成も似ており、古墳への副葬や祭祀関係の使用を目的として生産が行われたものと考えられる。両窯の立地は、谷筋を別にするものの東斜面に構築されている。寺谷廃寺Ｂ地点は、この両窯に挟まれた丘陵上にあたる。

寺谷廃寺周辺は、このように古墳に供献する須恵器を中心に早くから生産が開始されていた。こうした古墳時代的要素の強い須恵器生産の基盤を背景として、瓦生産も行われたと考えられる。

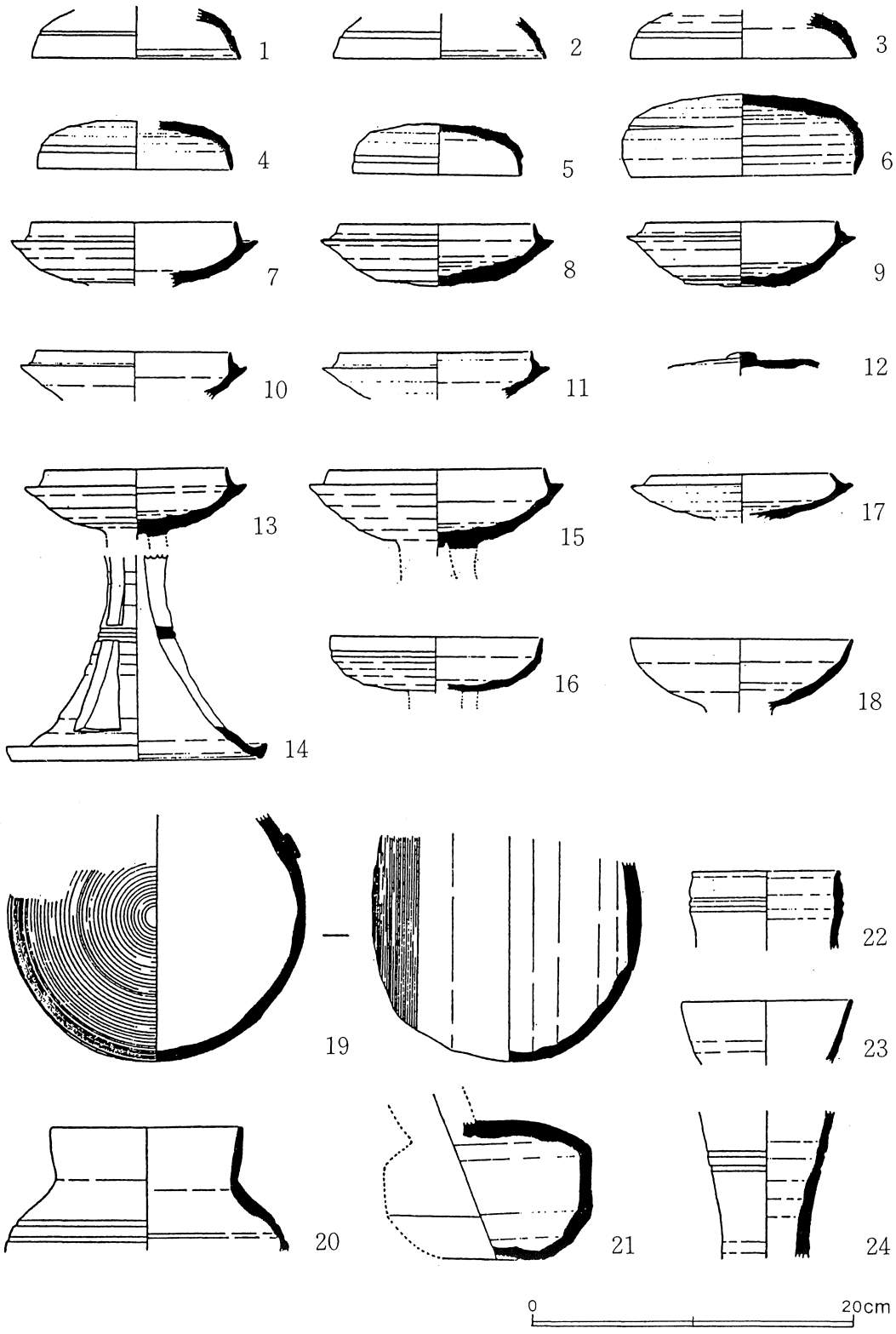


1 寺谷廃寺（A地点）　2 寺谷廃寺（B地点）　3 平谷窯跡　4 羽尾窯跡　5 平谷古墳群　6 大谷古墳群
7 表古墳群　8 唐子古墳群　9 中尾古墳群　10月輪神社古墳　11月輪古墳群　12東両表古墳群
13寺前古墳群　14鼻田沼古墳群　15小姓前古墳群　16両表古墳群　17郭古墳群　18大木古墳群
19駒形古墳　20栗谷古墳群　21糟沢古墳群　22後谷古墳群　23中山古墳群　24西山古墳群
25岩屋塚古墳群　26表前古墳群　27長淵 1 号墳　28長渕 2 号墳

第 1 図　周辺の遺跡



第2図　平谷窯跡出土遺物（『関東の初期寺院』より転載）



第3図　羽尾窯跡出土遺物（『関東の初期寺院』より転載）

2　出土遺物について

寺谷廃寺周辺から採集された資料は、瓦747点、須恵器８点である。採集された地点は第４図に示したとおり、興長禅寺の裏山にあたる丘陵部分である。丘陵は南北にやせた尾根状になっており、特に瓦類は、興長禅寺の墓地部分を中心としたＡ地点と丘陵南端部のＢ地点から多く出土した。

Ａ地点とＢ地点で採集された瓦は、軒丸瓦６点（素弁８葉・単弁10葉）、軒平瓦６点（三重弧）、丸瓦17点、平瓦717点であった。平瓦の破片数が圧倒的に多く、丸･平瓦の比率は98％が平瓦で占められる結果となる。Ａ地点とＢ地点では採集した平瓦に整形技法の大きな差が認められた。その結果は、第１表寺谷廃寺瓦分析表に示したとおりである。以下、主な出土遺物について述べる。

軒丸瓦　軒丸瓦は素弁８葉蓮華紋軒丸瓦が３種類、単弁10葉蓮華紋軒丸瓦が１種類確認されている。

第１類（第５図１）　素弁８葉蓮華紋軒丸瓦である。瓦当に対して中房は低く、蓮子は１＋４で間弁の延長線上に配置される。推定直径は14.8cm、内区径11.2cm、中房径3.7cmである。小振りで瓦当厚は最も厚いところで1.9cmである。蓮弁は弁端に桜花状に切りこみ、弁は膨らみをもつ。飛鳥寺の「花組」にみられる蓮弁の周縁より緩やかに盛り上がる形状とはやや異なる。弁と外区外縁との間はやや幅が広い。瓦当裏面はナデが施され、外周を低く、内側をやや盛り上げて仕上げている。全体に弱い凹凸が見られる。色調は表裏面とも淡灰色である。胎土は白色針状物質、砂粒子を混在する。採集地点はＡ地点で、興長禅寺裏山のくびれ部付近の墓地である。

第２類（第５図２）　素弁８葉蓮華紋軒丸瓦である。第１類と類似するが、中房の蓮子は１個確認できたが、蓮弁の中軸線上に配置され、１＋４の蓮子を配するものと推定される。１と２は蓮子の位置が異なることから同紋異笵である。推定直径は15.0cm、中房径3.6cm、瓦当厚1.6cmである。蓮弁は中房に接する部分が残存する。間弁は中房に接し、細いながらも明瞭に隆起している。外区外縁の外周部はヘラで横方向に調整される。瓦当裏面はナデで調整されるが、第１類ほどには中心部が盛り上がる状況はみられない。丸瓦との接合は補強粘土が少なく、薄手の丸瓦が使用されたものと推定される。瓦当裏面の剝がれた状況からは、丸瓦の当たる位置を幾分平坦に削り込み、広端部の両面を削った丸瓦を差し込んでいる可能性が高い。色調は褐灰色で、剝離面は褐色気味である。胎土は細かい砂粒を含み、白色粒子、角閃石粒子を含む。採集地点はＢ地点とした場所の台地上部の散布が多いとした付近である。

第３類（第５図３）　素弁８葉蓮華紋軒丸瓦である。第１・２類と比較してやや大きい。推定直径16.5cm、内区径12.5cm、中房径2.8cmと推定できる。周縁は直立縁で素紋である。蓮弁は弁端の反転を桜花状に表現し、薄手である。瓦当と丸瓦の接合部は、補強粘土を込めて指圧した後、ナデ調整を行っている。丸瓦凹面には布目が残る。色調は瓦当面が淡明褐色、裏面は淡褐色である。胎土は白色微砂粒子、角閃石粒子、砂粒子を含む。焼成は酸化焔である。採集地点はＢ地点である。

第４類（第５図４～６）　単弁10葉蓮華紋軒丸瓦と推定される。花弁の中央に中房から細長く隆起した子葉をもつ。いわゆる､「棒状子葉」と呼んでいるものである。直径も18～20cmと推定される。瓦当裏面はナデで調整され、補強粘土もやや多い。丸瓦との接合は明瞭ではなかったが、接合する丸瓦は厚手のものが使用される。色調は灰色。焼成は還元焔である。採集地点はＡ地点である。

羽尾
裏郷南
A地点
興長禅寺
杉ノ谷沼
平谷窯跡
B地点
灯篭沼
裏郷南
羽尾窯跡
五厘沼窯跡
五厘沼
高屋敷沼
稲荷山
散布 多
普
少
窯跡
0
100m

第4図　出土地点

第１表　寺谷廃寺瓦分析表

（片）

	焼成１	焼成２	焼成３	計	B地点	B地点	A地点	計
ナデ	141	65	18	224	45	116	63	224
叩き＋ナデ	245	13	0	258	41	205	12	258
叩き	2	188	7	197	3	14	180	197
ハケ	0	7	42	49	1	2	46	49
不明	7	11	1	19	1	8	10	19
計	395	284	68	747	91	345	311	747

軒平瓦　軒平瓦は６点が出土し、すべて型挽三重弧紋軒平瓦である。

第１類（第５図７～12）　全体に顎部の剝離が目立つ。７の瓦当面は比較的薄く、型挽きにより三重弧を表現する。色調は灰色。焼成は還元焰である。８は顎部の欠損した平瓦部である。瓦当面は２段の弧が残る。９～12は顎部の剝離した破片である。いずれも、顎部の長さは3.7cm～５cmと均一ではないが、相対的に短い。色調は赤褐色。焼成は酸化焰である。採集地点はＡ地点である。

丸瓦

第１類（第６図14・15・17）　厚手で、焼成がやや不良である。凸面の調整はナデを施し、凹面には布目が残る。採集地点は14・17がＡ地点である。

第２類（第６図13・16・18～21）　薄手で、焼成が良好である。凸面の調整は格子叩きを施した後、丁寧なナデもしくはヘラナデを施す。凹面は布目を部分的にナデ消している。採集地点はいずれもＢ地点である。

丸瓦はいずれも行基式と考えられる。

平瓦（第７～19図22～170）

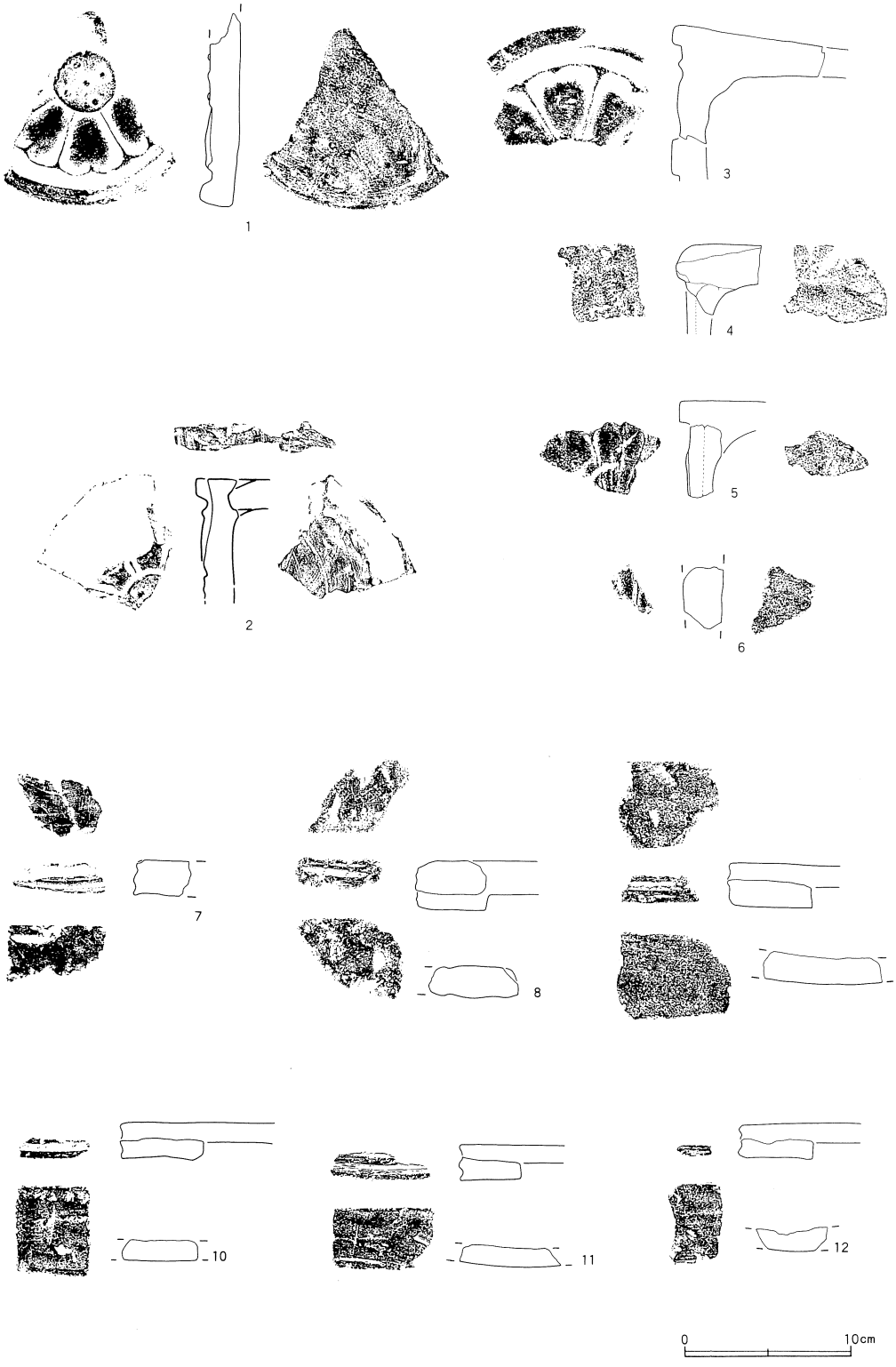
平瓦は大半が小破片である。Ａ地点、Ｂ地点とも平瓦の占める割合が圧倒的に多く、大半が粘土板桶巻きつくりの特徴をもつ。しかし、瓦の調整法は大きく異なる。

Ｂ地点から採集された資料の多くは、薄手で、粘性が強く、胎土が緻密である。焼成も非常に良く焼きしまっている。凸面は格子叩きを施した後、丁寧なナデ調整で叩きを消している。叩き具の主体は斜格子叩きで、６種類（格子１類～格子６類）ほど確認できる。凸面に丁寧なナデを施しているため叩き具が確認できない破片も多く、さらに種類が増える可能性もある。また、器面の凹凸があり平坦ではなく波打つ状態のものもある。さらに、側面の調整法が特徴的で、縦方向に細かく削り込む。

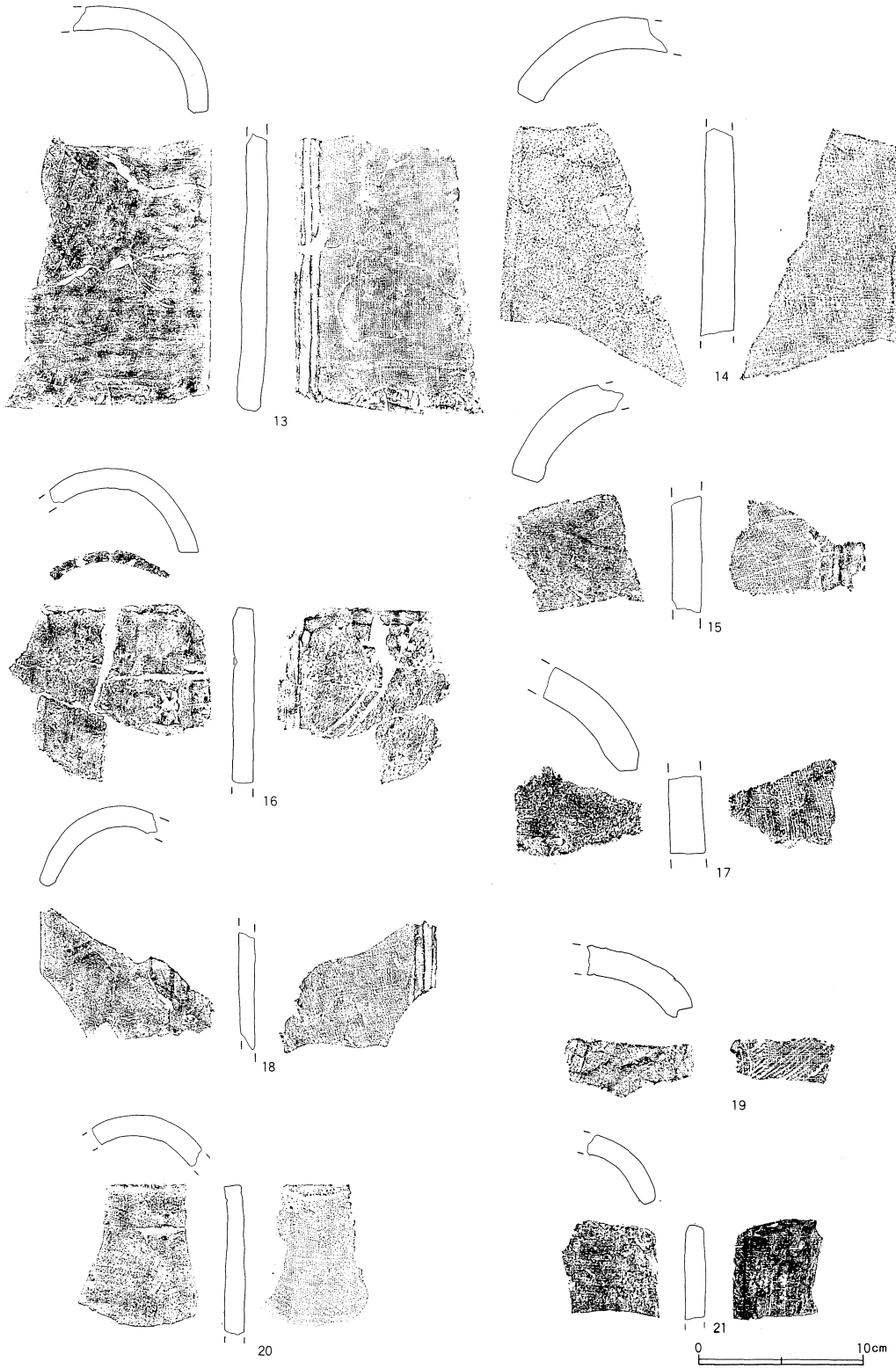
Ａ地点から採集された資料の多くは厚手で、粘性に欠け、胎土がやや粗い。焼成温度も低い。凸面は斜格子叩きを全体に施し９種類（格子７類～格子15類）も確認した。その他に、凸面に全面ヘラケズリや、全面ヨコハケ調整を施すものも確認した。平瓦総破片数728点中149点を図示した。全体の大きさは復元できないが、概ね広端面は25cm前後、側面は30cm前後と推定される。

須恵器（第19図171～178）

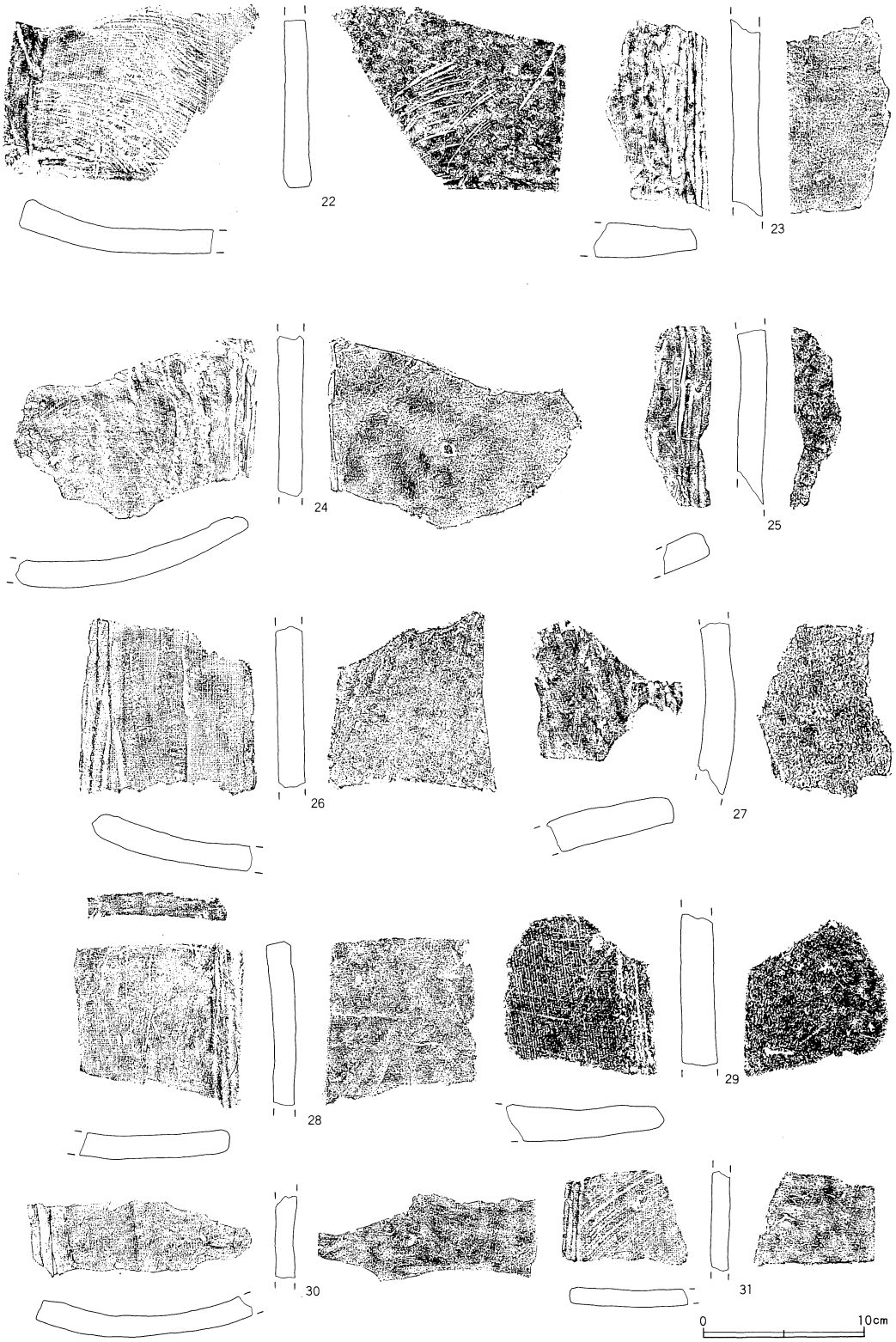
採集された資料の中にわずかに須恵器の小型甕の破片がある。いずれも、Ｂ地点の採集資料である。胴部外面は、平行叩きを施す。177は叩きをナデ消している。内面は青海波文が残る。胎土は白色粒子を含む。焼成良好で、色調は灰～褐灰色である。また、Ａ地点からも少量ではあるが、須恵器甕・壺の破片が検出されている。



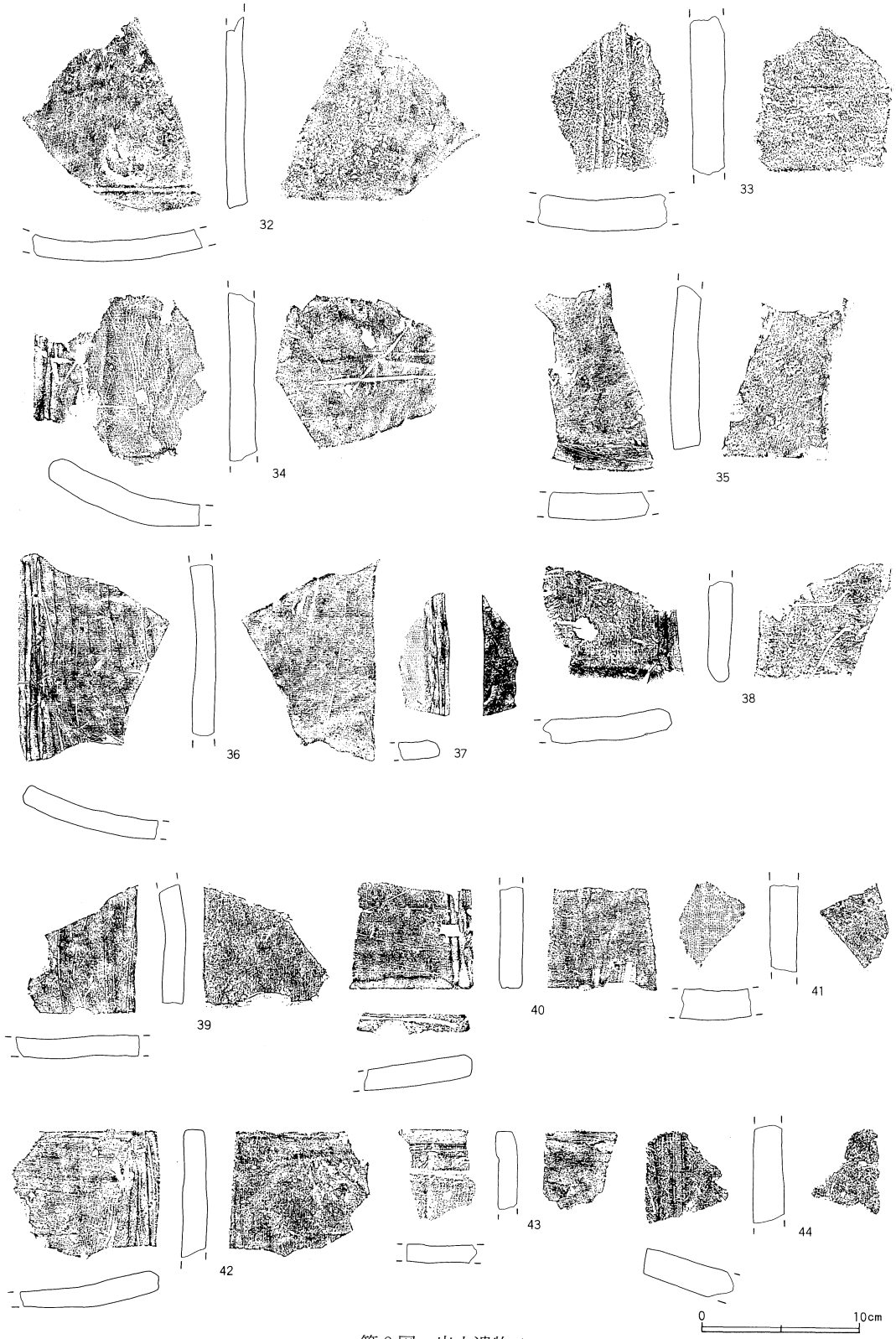
第5図　出土遺物1



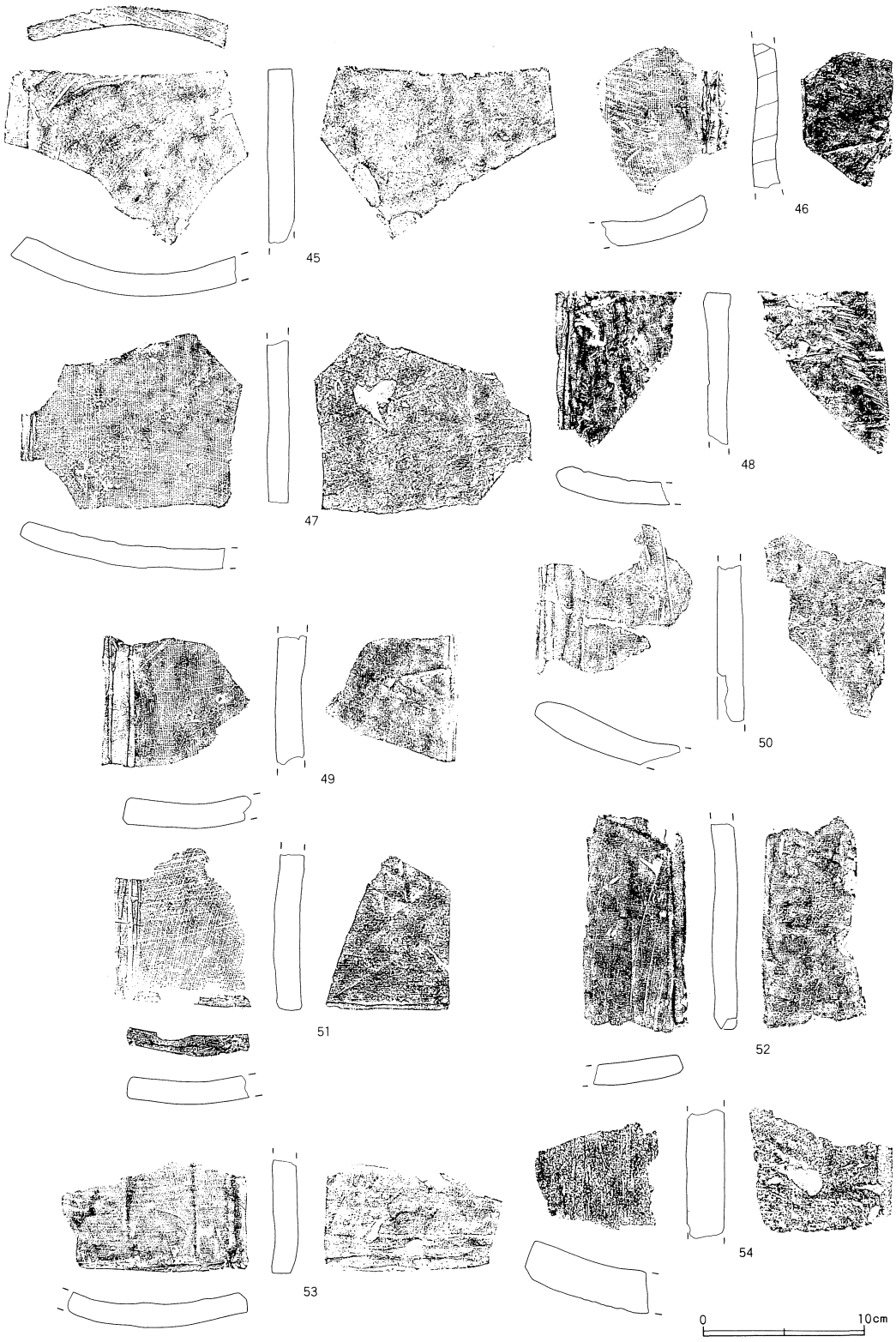
第6図　出土遺物2



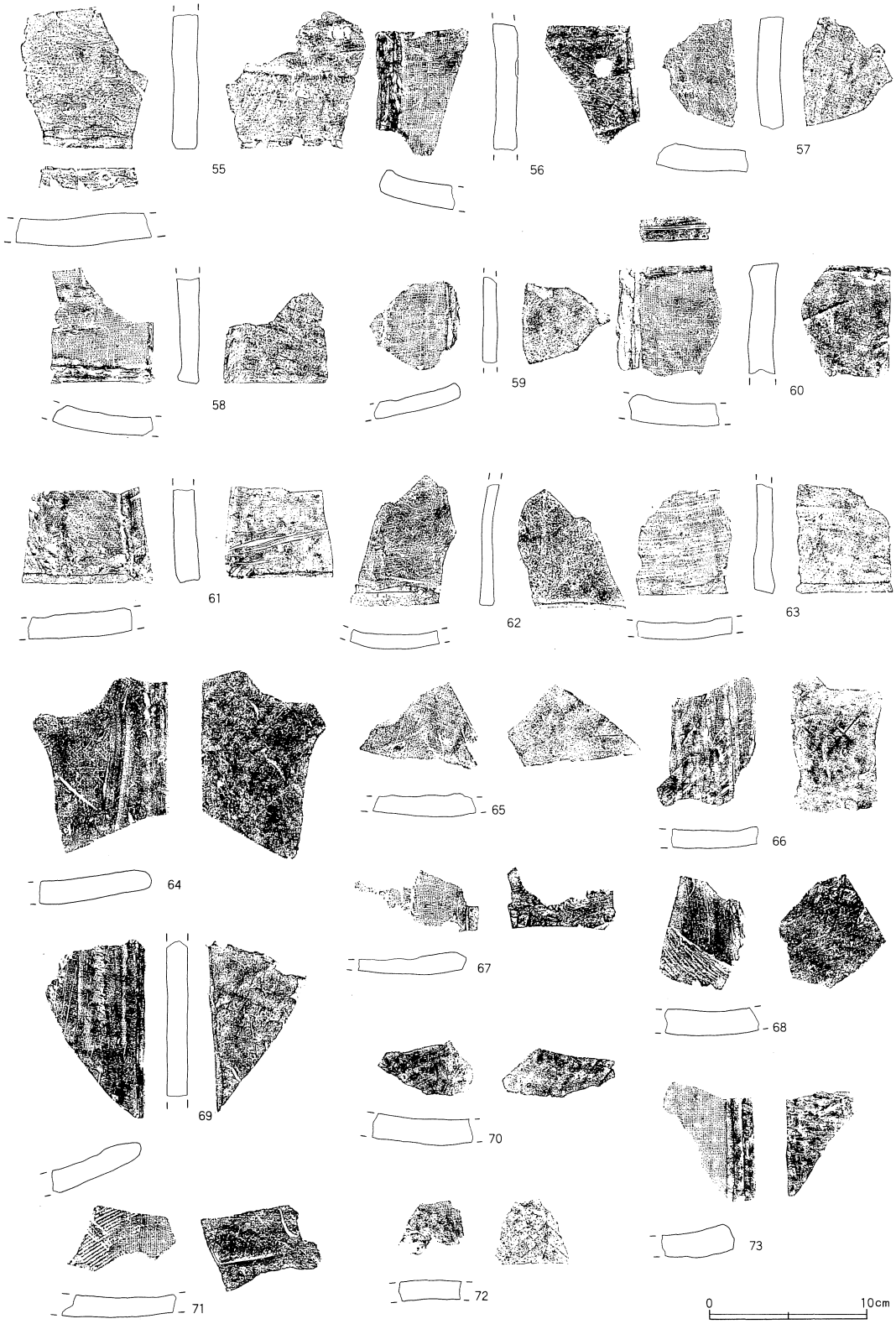
第7図　出土遺物3



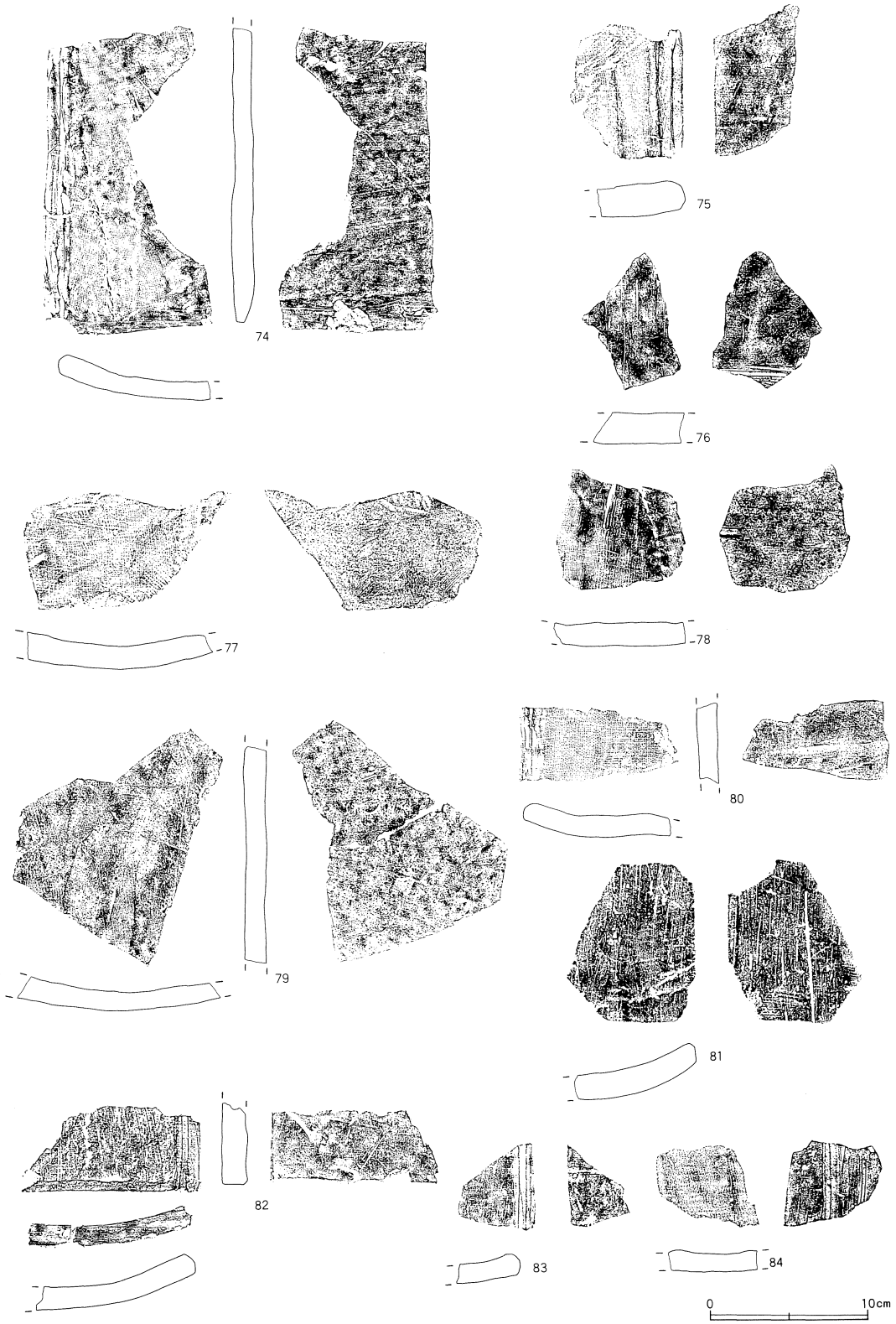
第 8 図　出土遺物 4



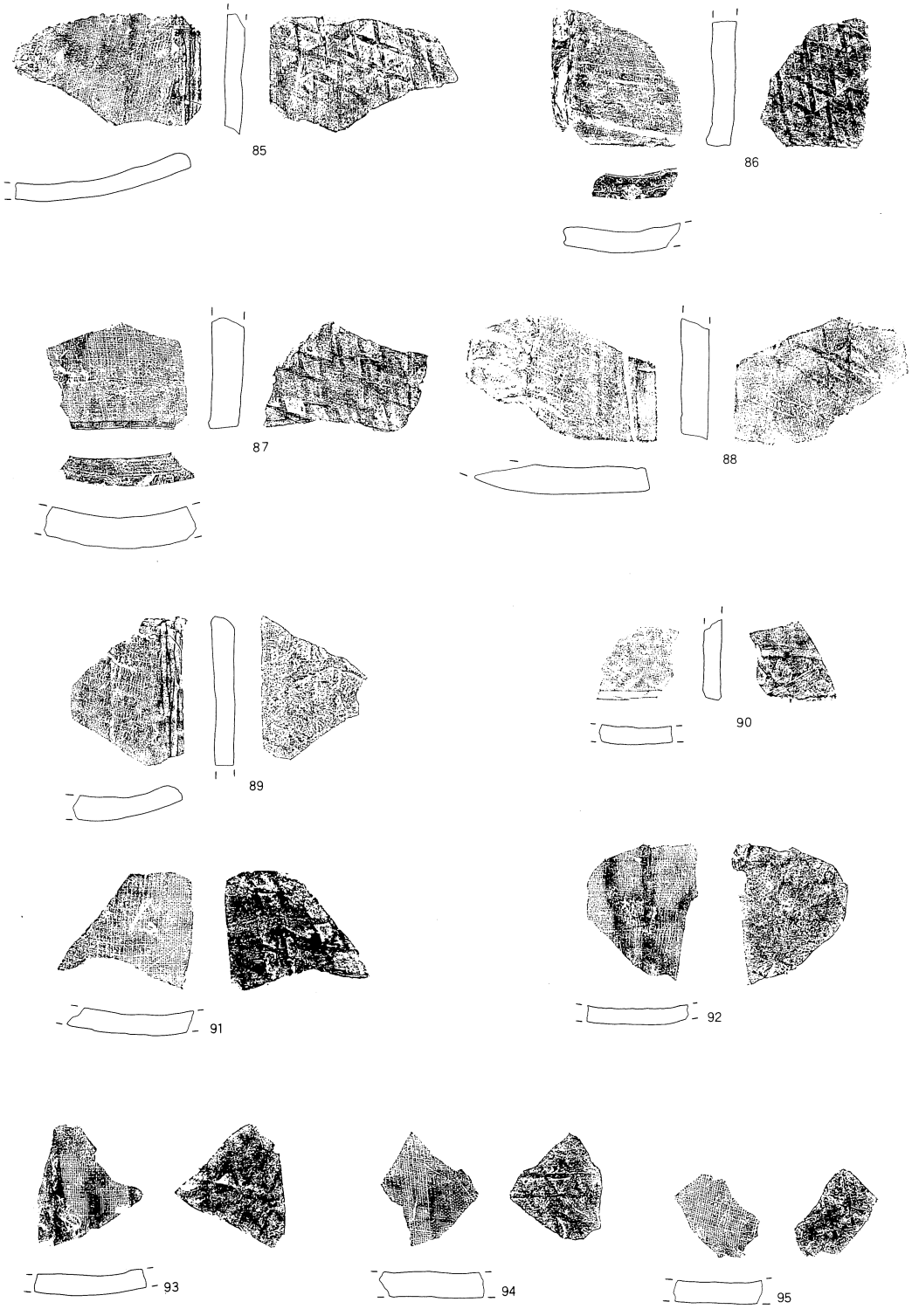
第9図　出土遺物5



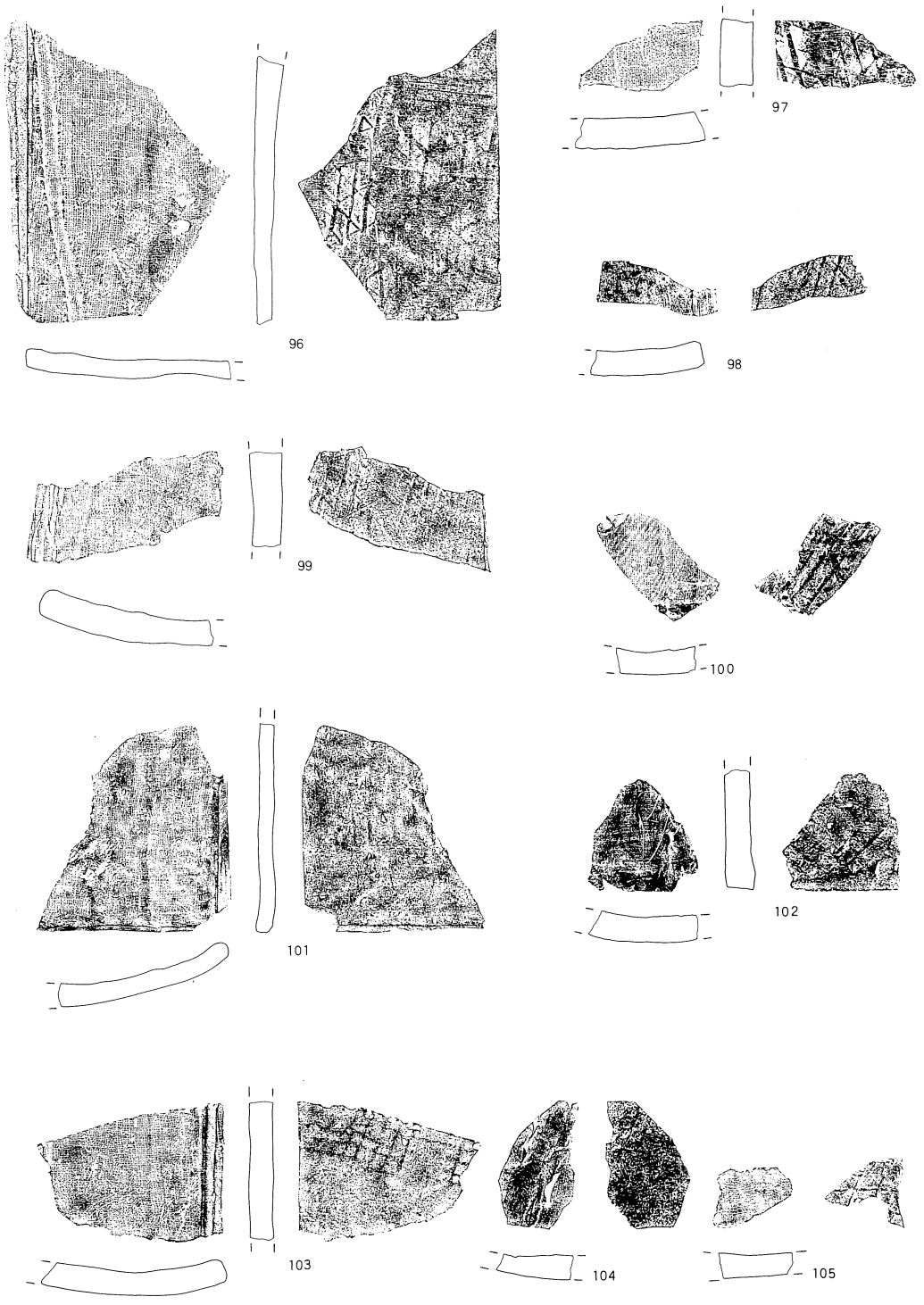
第10図　出土遺物 6



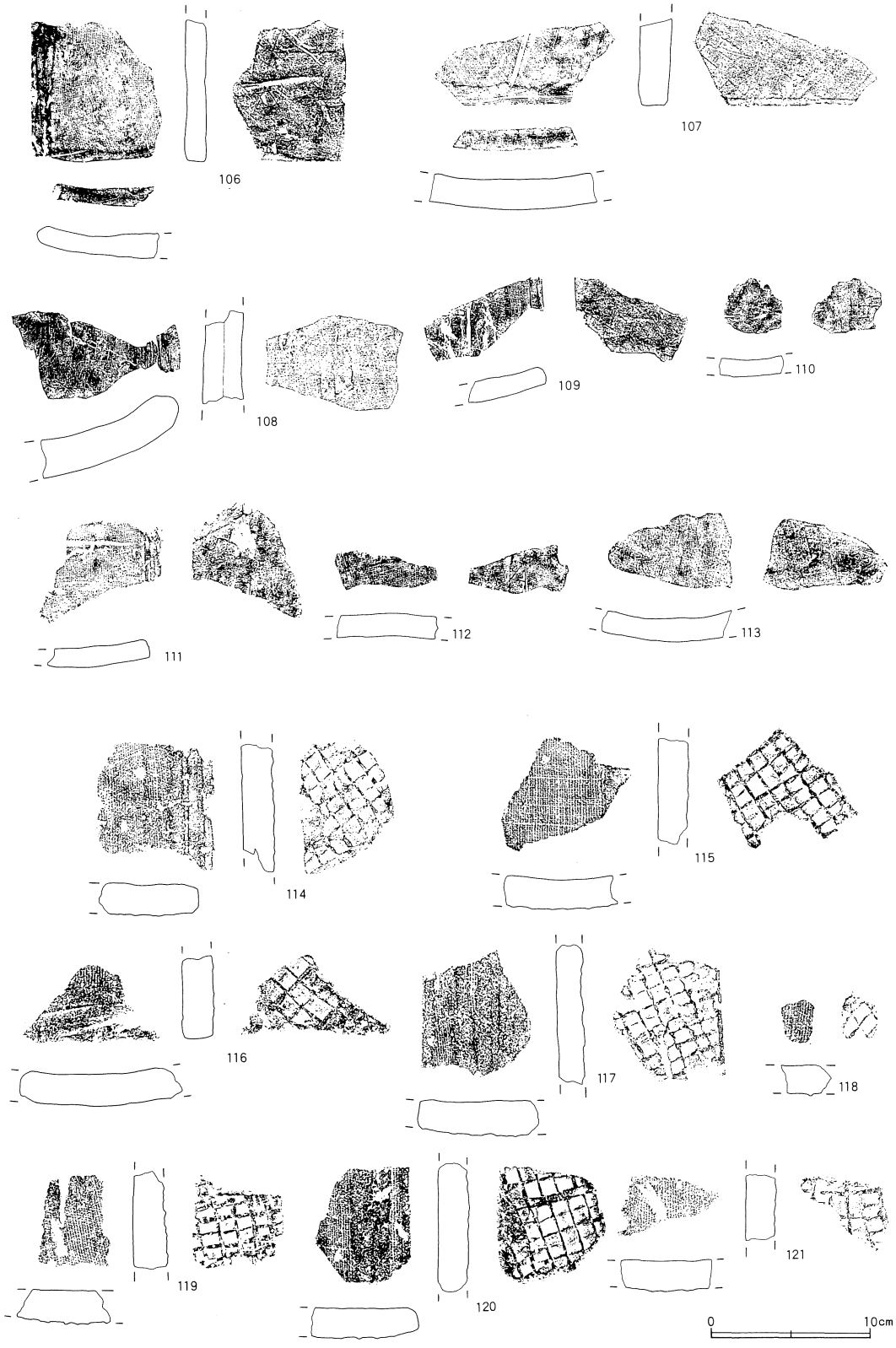
第11図　出土遺物７



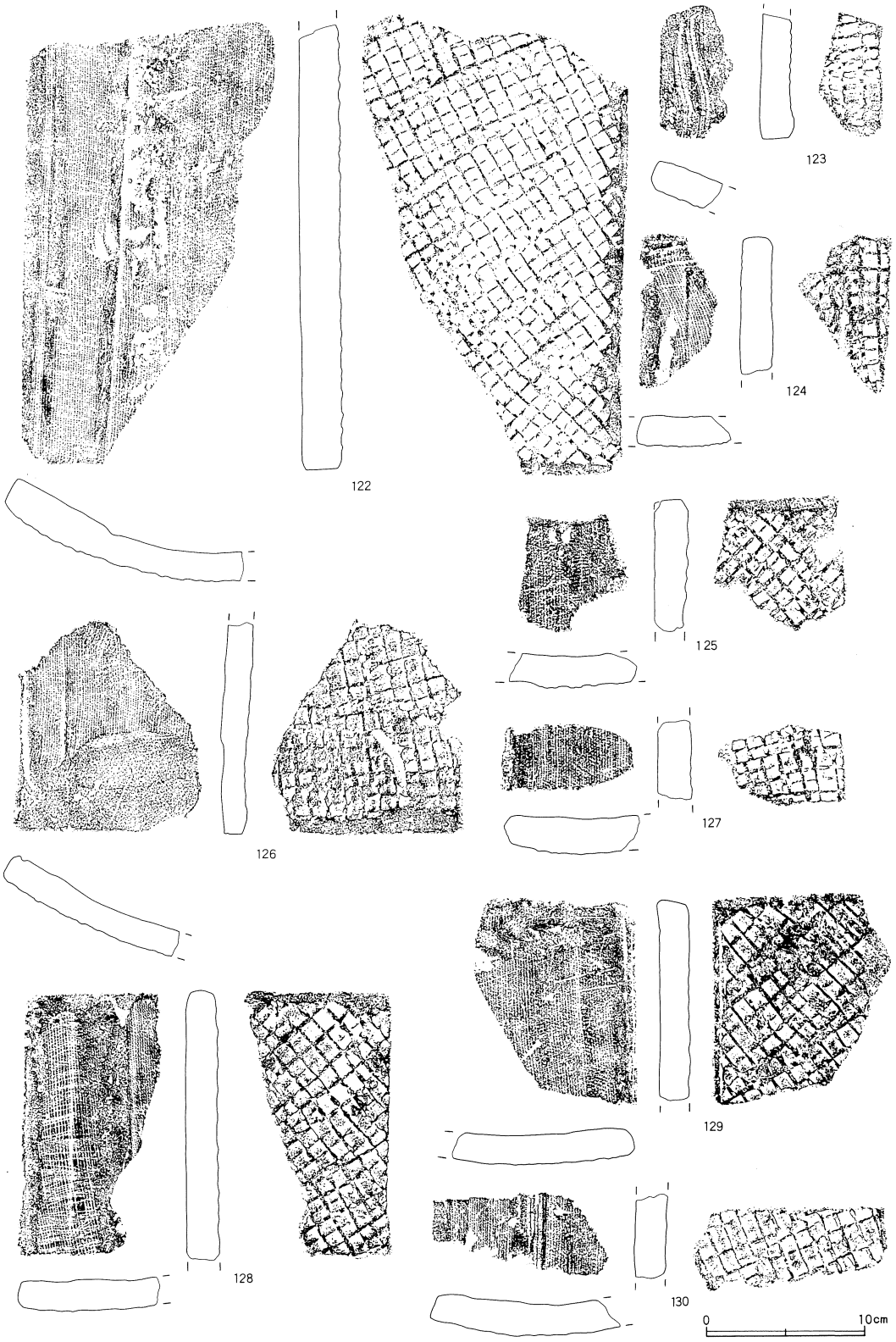
第12図　出土遺物 8



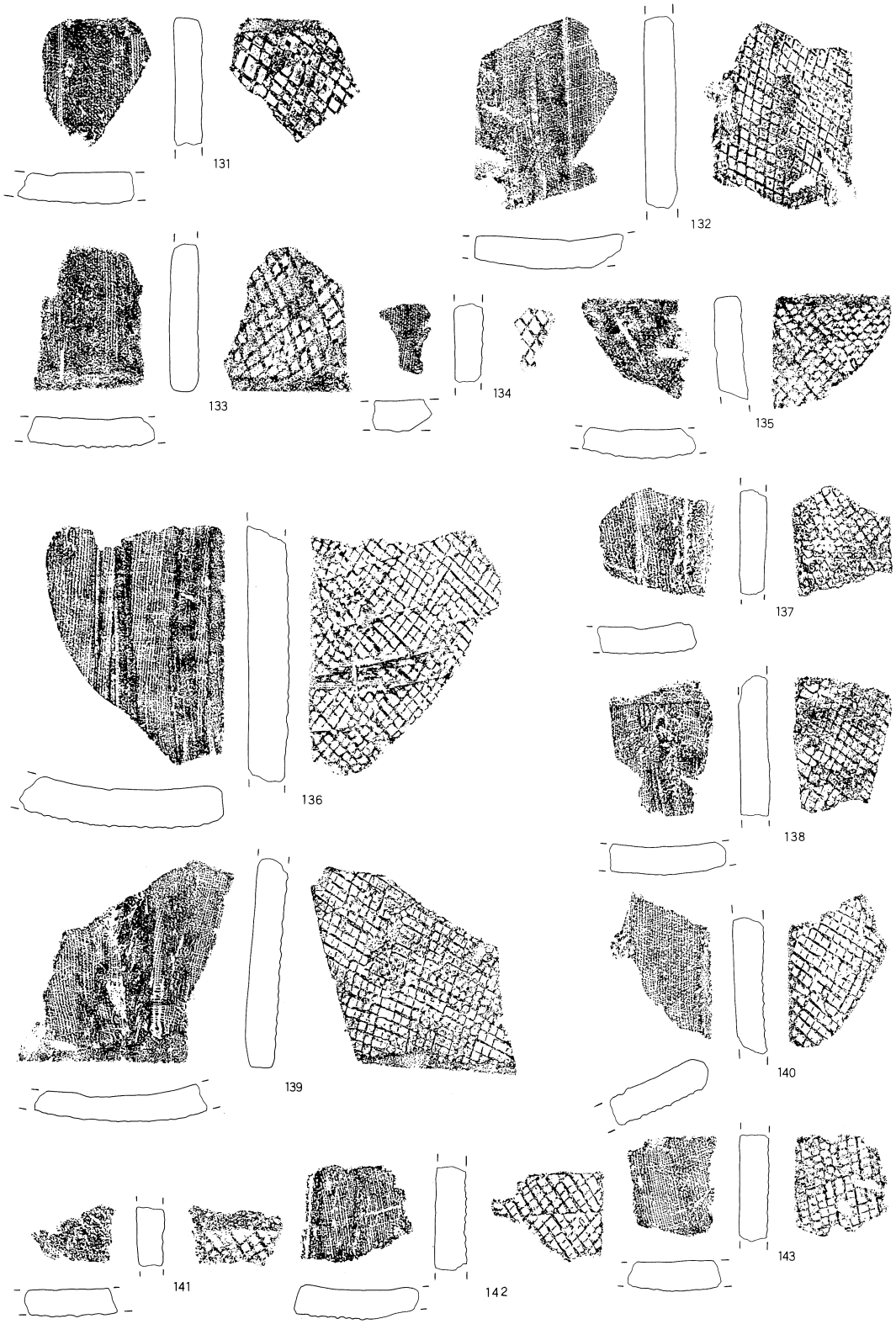
第13図　出土遺物９


106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
0
10cm

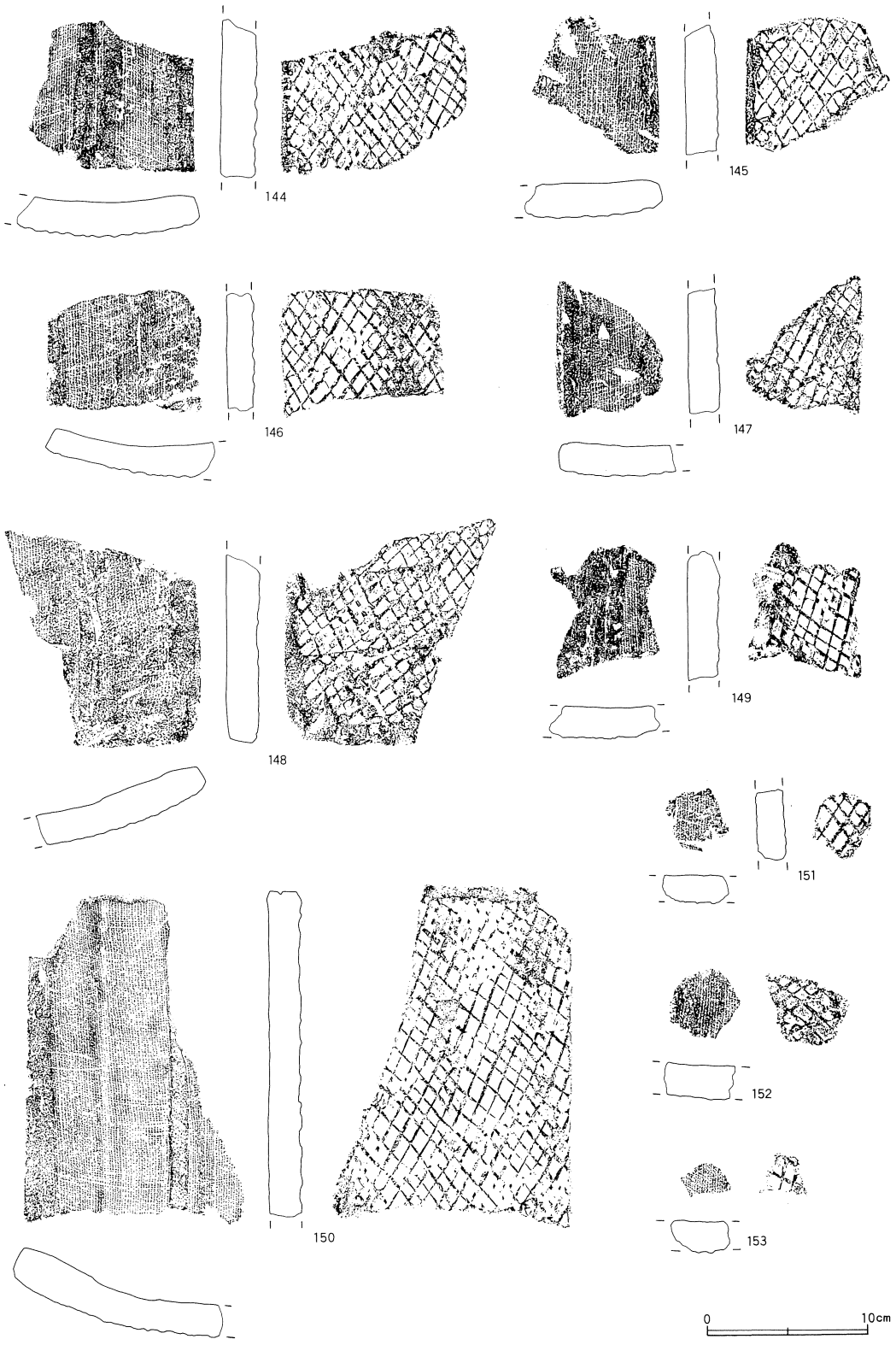
第14図　出土遺物10



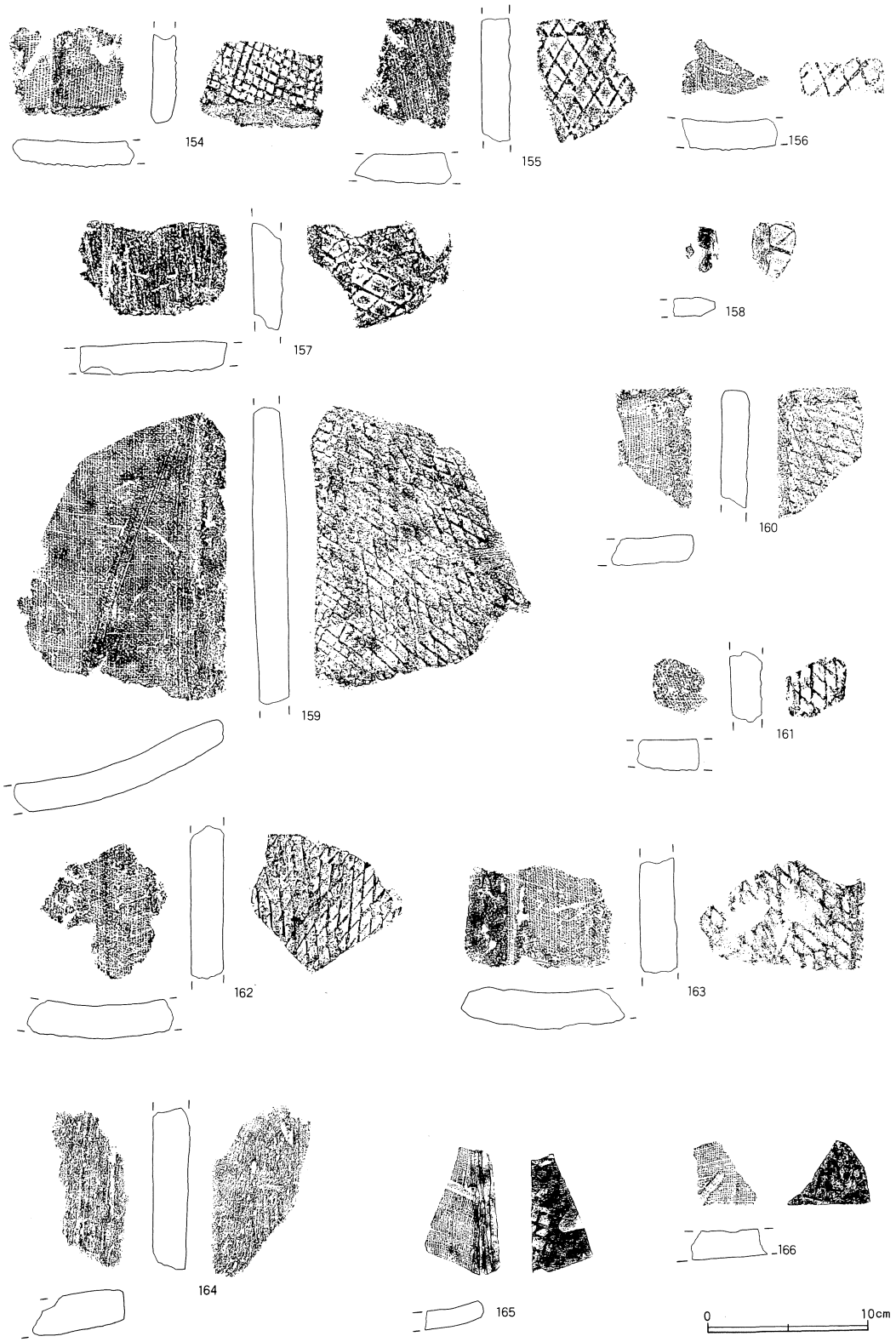
第15図　出土遺物11



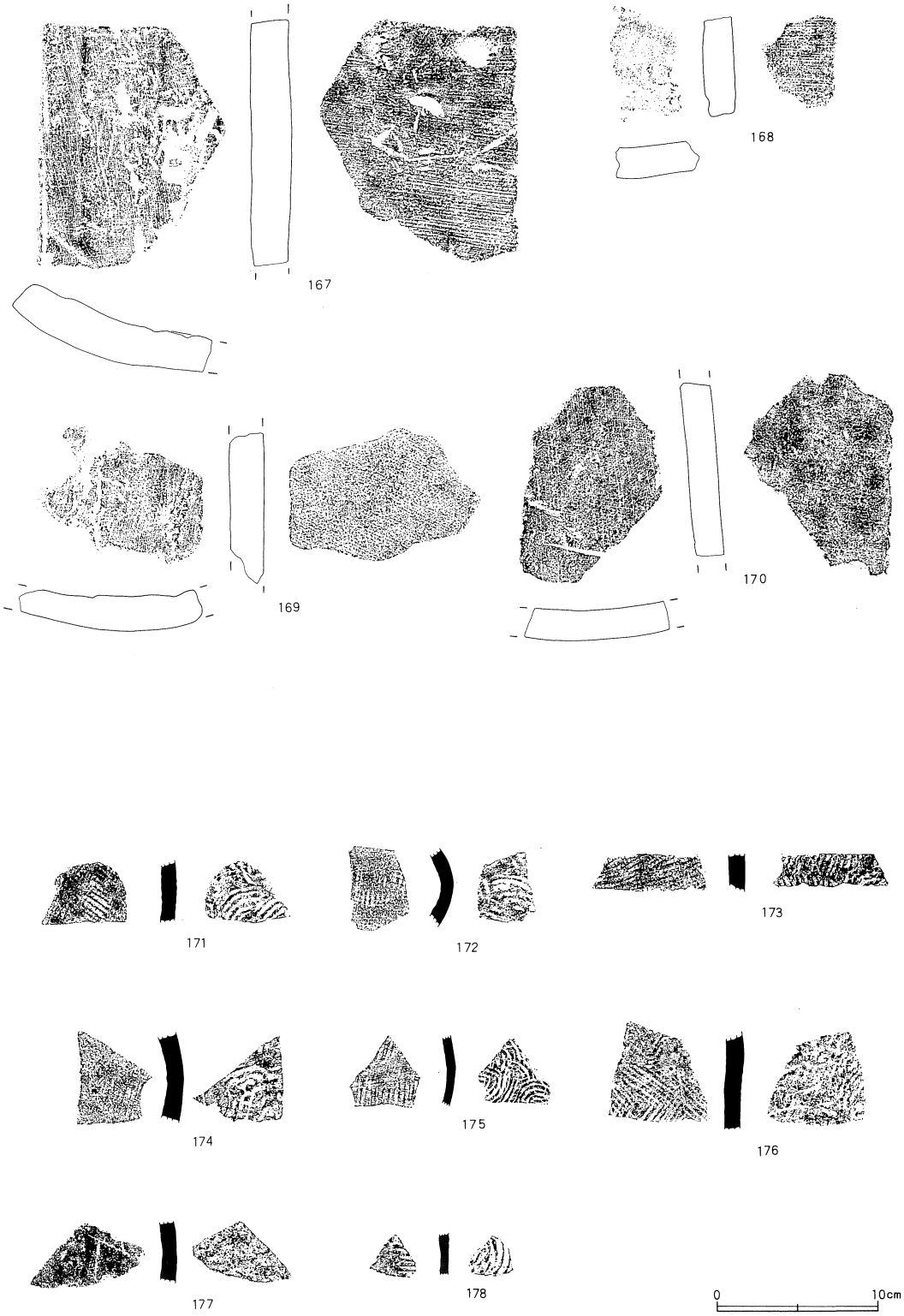
第16図　出土遺物12



第17図　出土遺物13



第18図　出土遺物14



第19図　出土遺物15

第2表　寺谷廃寺瓦観察表

番号	地点	種類	厚さ		叩き種類	凸面	凹面布目		色調	焼成	分類	備考
			最大	最小		種類	縦(本)	横(本)				
1	A	軒丸瓦			素弁八葉				淡　灰	1		
2	B	軒丸瓦			素弁八葉				褐	1		
3	A	軒丸瓦			素弁八葉				淡褐灰	1		
4	A	軒丸瓦	3.10	2.80	単弁十葉	ナデ	10		灰	2		
5	A	軒丸瓦			単弁十葉				淡　灰	2		
6	A	軒丸瓦	2.50	2.30	単弁十葉	ナデ			灰	2		
7	A	軒平瓦	2.20	1.95	三重弧文	布目＋ナデ	10		褐	2		
8	A	軒平瓦	2.05	1.80	三重弧文	布目＋ナデ			灰	2		
9	A	軒平瓦	1.80	1.70	三重弧文				暗　灰	2		
10	A	軒平瓦			三重弧文				橙　褐	2		
11	A	軒平瓦	1.20	1.10	三重弧文				橙　褐	2		
12	A	軒平瓦			三重弧文				橙　褐	2		
13	B	丸　瓦	1.40	1.25	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	9	茶　褐	1		
14	A	丸　瓦	1.90	1.60	ナデ	布目	11	10	褐	2		
15	B	丸　瓦	1.90	1.70	斜格子＋ナデ	布目	9	8	褐	1		
16	B	丸　瓦	1.25	1.15	ナデ	布目＋ヘラナデ	10	8	褐	1		
17	A	丸　瓦	2.10	2.00	ナデ	布目＋ナデ	7	7	灰	2		
18	B	丸　瓦	1.30	1.00	斜格子＋ヘラナデ	布目＋ナデ	11	10	褐	1		
19	B	丸　瓦	1.75	1.60	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	9	7	乳　白	1		
20	B	丸　瓦	1.10	0.90	斜格子＋ナデ	布目	9	8	暗　灰	1		
21	B	丸　瓦	1.20	1.10	ナデ	布目＋ナデ			淡　褐	1		
22	B	平　瓦	1.80	1.20	ナデ	布目	11	10	乳　白	2	ナ　デ	糸きり
23	B	平　瓦	1.90	1.60	ナデ	布目＋ナデ			淡　灰	1	ナ　デ	
24	B	平　瓦	1.60	1.50	ナデ	布目＋ナデ			茶　褐	1	ナ　デ	布とじ
25	B	平　瓦	1.75	1.60	ナデ	ナデ			褐	1	ナ　デ	
26	B	平　瓦	1.60	1.40	ナデ	布目＋ヘラナデ	11	11	橙　褐	2	ナ　デ	
27	B	平　瓦	2.00	1.75	ナデ	布目＋ヘラナデ			褐	1	ナ　デ	
28	B	平　瓦	1.60	1.40	ナデ	布目＋ヘラナデ	11	11	乳　白	1	ナ　デ	
29	A	平　瓦	2.25	1.95	ナデ	布目	7	7	褐　灰	2	ナ　デ	
30	B	平　瓦	1.60	1.50	ナデ	布目＋ナデ	13	10	灰	1	ナ　デ	
31	B	平　瓦	1.10	1.00	ナデ	布目＋ナデ	9	8	乳　白	1	ナ　デ	糸きり
32	B	平　瓦	1.40	1.20	ナデ	布目＋ナデ	10	8	乳　白	1	ナ　デ	
33	A	平　瓦	2.00	1.95	ナデ	布目＋ナデ			灰	2	ナ　デ	
34	B	平　瓦	2.00	1.65	ナデ	布目＋ナデ	11	10	褐	1	ナ　デ	
35	B	平　瓦	1.80	1.50	ナデ	ナデ			褐	1	ナ　デ	
36	B	平　瓦	1.30	1.15	ナデ	ヘラナデ			乳　白	1	ナ　デ	
37	B	平　瓦	1.10	1.00	ナデ	布目＋ナデ	13	12	青　灰	1	ナ　デ	
38	B	平　瓦	1.60	1.40	ナデ	布目＋ナデ			褐	1	ナ　デ	分割突起
39	B	平　瓦	1.30	1.20	ナデ	ヘラナデ			褐	1	ナ　デ	
40	B	平　瓦	1.40	1.30	ナデ	布目＋ナデ			淡　褐	1	ナ　デ	
41	B	平　瓦	1.85	1.65	ナデ	布目	10	8	灰	1	ナ　デ	
42	B	平　瓦	1.60	1.40	ナデ	布目＋ナデ	10	10	褐	1	ナ　デ	
43	B	平　瓦	1.20	1.10	ナデ	布目＋ナデ	11	9	乳　白	1	ナ　デ	布結び
44	A	平　瓦	1.90	1.60	ナデ	布目＋ナデ			灰	2	ナ　デ	
45	B	平　瓦	1.60	1.40	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ			褐	1	ナデ消し	
46	B	平　瓦	1.50	1.35	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	11	8	灰	1	ナデ消し	分割突起
47	B	平　瓦	1.30	1.15	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	8	褐	1	ナデ消し	
48	B	平　瓦	1.40	1.10	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	8		褐	1	ナデ消し	

番号	地点	種類	厚さ		叩き種類	凸面	凹面布目		色調	焼成	分類	備考
			最大	最小		種類	縦(本)	横(本)				
49	B	平瓦	1.60	1.50	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	7	茶褐	1	ナデ消し	
50	B	平瓦	1.60	1.50	斜格子＋ナデ	布目＋ヘラナデ			褐	1	ナデ消し	
51	B	平瓦	1.60	1.45	斜格子＋ナデ	布目＋ヘラナデ	10	8	灰	1	ナデ消し	
52	B	平瓦	1.50	1.10	斜格子＋ヘラナデ	布目＋ヘラナデ	10	9	褐	1	ナデ消し	
53	B	平瓦	1.55	1.45	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	12	11	乳白	1	ナデ消し	
54	A	平瓦	2.50	2.20	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ			灰	2	ナデ消し	
55	B	平瓦	1.80	1.50	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ			暗灰	1	ナデ消し	
56	B	平瓦	1.65	1.45	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	11	10	乳白	1	ナデ消し	
57	B	平瓦	1.50	1.30	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	11	11	灰	1	ナデ消し	
58	B	平瓦	1.45	1.20	斜格子＋ヘラナデ	布目＋ヘラナデ	11	10	灰	1	ナデ消し	
59	B	平瓦	0.90	0.80	斜格子＋ナデ	布目	12	11	淡灰	1	ナデ消し	布とじ
60	B	平瓦	1.60	1.50	斜格子＋ナデ	布目	9	9	青灰	1	ナデ消し	
61	B	平瓦	1.50	1.35	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	8	7	暗灰	1	ナデ消し	
62	B	平瓦	1.00	0.70	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	11	9	灰	1	ナデ消し	
63	B	平瓦	1.10	0.95	斜格子＋ヘラナデ	布目＋ナデ	13	10	灰	1	ナデ消し	
64	B	平瓦	1.55	1.45	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	12	9	乳白	1	ナデ消し	
65	B	平瓦	1.25	1.10	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	9	9	淡灰	1	ナデ消し	
66	B	平瓦	1.10	1.00	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	7	褐	1	ナデ消し	
67	B	平瓦	1.35	1.25	斜格子＋ナデ	布目	11	9	淡灰	1	ナデ消し	
68	B	平瓦	1.55	1.50	斜格子＋ナデ	布目＋ヘラナデ	10		茶褐	1	ナデ消し	
69	B	平瓦	1.35	1.20	斜格子＋ナデ	布目＋ヘラナデ	10	9	茶褐	1	ナデ消し	布とじ
70	B	平瓦	1.15	1.10	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ			茶褐	1	ナデ消し	
71	B	平瓦	1.30	1.10	斜格子＋ナデ	布目	11	9	褐	1	ナデ消し	糸きり
72	B	平瓦	1.30	1.20	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ			淡褐	1	ナデ消し	
73	B	平瓦	1.60	1.50	斜格子＋ナデ	布目	9	9	灰	1	ナデ消し	
74	B	平瓦	1.25	1.00	ナデ	布目＋ナデ	11	10	灰	1	ナデ消し	布とじ
75	B	平瓦	2.10	2.00	ナデ	布目＋ナデ	11	9	茶褐	1	ナデ消し	
76	B	平瓦	2.00	1.80	ナデ	布目＋ヘラナデ	9		青灰	1	ナデ消し	
77	B	平瓦	1.60	1.50	ナデ	布目＋ナデ	11	7	淡褐	1	ナデ消し	
78	不明	平瓦	1.50	1.20	ナデ	布目＋ナデ	12	10	乳灰	1	ナデ消し	
79	B	平瓦	1.60	1.20	ヘラナデ	布目＋ナデ	12	11	灰	1	ヘラナデ	
80	B	平瓦	1.55	1.20	ヘラナデ	布目＋ナデ	11	8	灰	1	ヘラナデ	
81	A	平瓦	1.80	1.40	ヘラナデ	布目＋ナデ	11	10	黒褐	2	ヘラナデ	
82	B	平瓦	1.50	1.40	ヘラナデ	布目＋ヘラナデ			茶褐	1	ヘラナデ	
83	不明	平瓦	1.30	1.25	ヘラナデ	布目＋ナデ	13	11	淡灰	1	ヘラナデ	
84	不明	平瓦	1.30	1.10	ヘラナデ	布目＋ナデ	12	9	乳白	1	ヘラナデ	
85	B	平瓦	1.10	1.00	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	11	10	褐	1	1	
86	B	平瓦	1.35	1.20	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	12	8	灰	1	1	布とじ
87	B	平瓦	2.00	1.80	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	9	8	灰	1	1	
88	B	平瓦	1.70	1.35	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	9	8	乳白	1	1	
89	B	平瓦	1.40	1.10	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	12	11	灰	1	1	
90	B	平瓦	1.15	0.95	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	9	淡褐	1	1	
91	B	平瓦	1.30	1.15	斜格子＋ナデ	布目＋ヘラナデ	8	10	褐	1	1	
92	B	平瓦	1.00	0.90	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	10	灰	1	1	
93	B	平瓦	1.25	1.10	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	10	褐	1	1	布とじ
94	B	平瓦	1.50	1.40	斜格子＋ナデ	布目	8	7	青灰	1	1	
95	B	平瓦	1.30	1.20	斜格子＋ナデ	布目	10	9	灰	1	1	
96	B	平瓦	1.60	0.70	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	9	7	灰	1	2	布とじ
97	B	平瓦	1.80	1.60	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	11	8	灰	1	2	

番号	地点	種類	厚さ		叩き種類	凸面	凹面布目		色調	焼成	分類	備考
			最大	最小		種類	縦(本)	横(本)				
98	B	平瓦	1.50	1.35	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ			暗灰	1	2	
99	B	平瓦	1.85	1.35	斜格子＋ヘラナデ	布目＋ナデ	13	11	淡灰	1	2	
100	B	平瓦	1.35	1.25	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	12	9	褐	1	2	
101	B	平瓦	1.35	0.90	斜格子＋ナデ	布目＋ヘラナデ	13	11	灰	1	2	
102	B	平瓦	1.65	1.50	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	5	茶褐	1	3	
103	B	平瓦	1.50	1.30	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	9	8	褐	1	3	
104	B	平瓦	1.45	1.00	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ			灰	1	4	
105	B	平瓦	1.50	1.35	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	10	茶褐	1	4	
106	B	平瓦	1.30	1.20	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	9		褐	1	5	
107	B	平瓦	2.00	1.80	斜格子＋ナデ	布目＋ヘラナデ	10	10	淡灰	1	5	
108	B	平瓦	2.50	2.30	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	15		灰	1	5	
109	B	平瓦	1.25	1.10	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	9	9	灰	1	5	
110	B	平瓦	1.35	1.10	斜格子＋ナデ	ナデ			青灰	1	5	
111	B	平瓦	1.25	1.15	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	11	10	淡灰	1	6	
112	B	平瓦	1.45	1.40	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	11	8	褐	1	6	
113	B	平瓦	1.40	1.30	斜格子＋ナデ	布目＋ナデ	11	11	乳白	1	6	
114	A	平瓦	2.05	1.95	格子	布目	7	8	青灰	2	7	
115	A	平瓦	2.10	1.90	格子	布目	10	7	灰	2	7	
116	A	平瓦	2.05	1.80	格子	布目＋ナデ			灰	2	7	
117	A	平瓦	1.75	1.60	格子	布目＋ナデ	9	7	灰	2	7	
118	A	平瓦	1.70	1.60	格子	布目	10	10	灰	2	7	
119	B	平瓦	2.50	2.00	格子	布目＋ナデ	9	6	灰	2	7	
120	A	平瓦	1.80	1.75	格子	布目＋ナデ	9	7	淡灰	2	7	
121	B	平瓦	1.80	1.70	格子	布目	7	7	灰	2	7	
122	A	平瓦	2.50	1.70	格子	布目＋ナデ	8	8	褐	2	7	
123	A	平瓦	2.00	1.70	格子	布目＋ナデ			乳灰	2	7	
124	A	平瓦	2.00	1.80	格子	布目＋ナデ	10	6	淡灰	2	7	
125	A	平瓦	2.10	1.85	格子	布目	8	6	灰	2	7	
126	A	平瓦	1.80	1.40	格子	布目＋ナデ	10	6	灰	2	7	
127	A	平瓦	2.00	1.90	格子	布目＋ナデ	8	6	灰	2	7	
128	A	平瓦	2.00	1.90	格子	布目＋ナデ	8	7	褐灰	2	7	
129	A	平瓦	1.80	1.70	格子	布目	8	6	褐灰	2	7	
130	A	平瓦	2.00	1.90	格子	布目＋ナデ	9	8	褐灰	3	7	
131	A	平瓦	1.80	1.80	斜格子	布目＋ナデ	8	7	橙褐	3	8	
132	A	平瓦	1.90	1.70	斜格子	布目＋ナデ	8	9	褐灰	2	8	
133	A	平瓦	1.75	1.55	斜格子	布目＋ナデ	8		褐灰	2	8	
134	A	平瓦	1.95	1.75	斜格子	布目	10	9	橙褐	2	8	
135	A	平瓦	1.80	1.60	斜格子	布目	9	8	褐	3	9	
136	A	平瓦	2.40	2.40	斜格子	布目＋ナデ	9	7	褐灰	2	10	
137	A	平瓦	1.85	1.40	斜格子	布目＋ナデ	9	8	淡灰	2	10	
138	A	平瓦	1.85	1.75	斜格子	布目＋ナデ	8	7	灰	2	10	
139	A	平瓦	1.90	1.70	斜格子	布目＋ナデ	8	6	橙褐	2	10	
140	A	平瓦	2.00	1.90	斜格子	布目	9	7	灰	2	10	
141	A	平瓦	1.55	1.50	斜格子	布目			茶褐	2	10	
142	A	平瓦	1.95	1.90	斜格子	布目＋ナデ	8	7	灰	2	10	
143	A	平瓦	1.80	1.55	斜格子	布目＋ナデ	9	8	橙褐	2	10	
144	A	平瓦	1.90	1.80	斜格子	布目＋ナデ	10	7	褐灰	2	11	
145	A	平瓦	2.00	2.00	斜格子	布目＋ナデ	10	7	灰	2	11	
146	A	平瓦	2.00	1.40	斜格子	布目＋ナデ	10	6	灰	2	11	

番号	地点	種類	厚さ		叩き種類	凸面	凹面布目		色調	焼成	分類	備考
			最大	最小		種類	縦(本)	横(本)				
147	A	平瓦	1.80	1.65	斜格子	布目＋ナデ	7	6	灰	2	11	
148	A	平瓦	2.20	1.90	斜格子	布目＋ナデ	8	6	灰	2	11	
149	A	平瓦	2.00	1.80	斜格子	布目＋ヘラナデ	7	8	橙 褐	2	11	
150	A	平瓦	2.40	2.10	斜格子	布目＋ナデ	9	6	褐	2	11	
151	A	平瓦	1.80	1.60	斜格子	布目	10	8	橙 褐	2	11	
152	A	平瓦	2.15	1.95	斜格子	布目＋ナデ	9	8	褐	3	11	
153	A	平瓦	1.95	1.85	斜格子	布目	8	8	褐	2	11	
154	A	平瓦	1.50	1.40	斜格子	布目＋ナデ	9	6	暗 灰	2	12	
155	A	平瓦	1.80	1.80	斜格子	布目	9	9	褐	2	13	
156	A	平瓦	1.65	1.60	斜格子	布目	7	7	茶 褐	2	13	
157	A	平瓦	1.75	1.60	斜格子	布目＋ヘラナデ	6		褐	2	13	
158	B	平瓦	1.30	1.10	斜格子	ナデ			青 灰	1	13	
159	A	平瓦	1.90	1.60	斜格子	布目＋ナデ	9	7	褐 灰	2	14	
160	A	平瓦	1.60	1.60	斜格子	布目	9	6	灰	2	14	
161	A	平瓦	1.95	1.70	斜格子	布目	9	8	橙 褐	2	14	
162	A	平瓦	2.10	1.90	斜格子	布目	9	7	黒 褐	3	14	
163	B	平瓦	2.30	2.00	斜格子	布目	9	7	橙 褐	2	14	
164	A	平瓦	2.30	2.15	ヘラケズリ	布目＋ヘラケズリ			黒 褐	3	ケズリ	
165	不明	平瓦	1.20	1.00	格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	8	灰	1	15	
166	B	平瓦	1.60	1.50	格子＋ナデ	布目＋ナデ	10	8	淡 灰	1	15	
167	A	平瓦	2.40	2.10	ハケ	布目＋ナデ	10	8	暗 褐	3	ハケ	
168	B	平瓦	2.00	1.90	ハケ	布目＋ナデ	6		暗 褐	3	ハケ	
169	A	平瓦	2.20	1.80	ハケ	布目＋布トジ	9	9	黒 褐	3	ハケ	
170	A	平瓦	1.90	1.70	ハケ	布目＋ナデ	12	12	黒 褐	3	ハケ	

第3表　寺谷廃寺須恵器観察表

番号	色	種類	叩き種類	内面	胎土	色調	焼成	備考
171	B	須恵器甕	平行	青海波文	白色粒子	灰	1	自然釉付着
172	B	須恵器壷	平行	青海波文	白色粒子	褐灰	1	
173	B	須恵器甕	平行	青海波文	白色粒子	灰	1	
174	B	須恵器甕	平行＋ナデ	青海波文	白色粒子	褐灰	1	
176	B	須恵器甕	平行	青海波文	白色粒子	灰	1	
177	B	須恵器甕		青海波文	白色粒子　黒色粒子	暗灰	1	自然釉付着
178	B	須恵器甕	平行	青海波文	白色粒子	淡灰	1	
287	B	須恵器甕	平行＋ハケ	青海波文	白色粒子　砂粒子	橙褐	1	

※焼成　1良好　2普通　3不良

3　軒先瓦について

軒丸瓦

寺谷廃寺の軒丸瓦は4種類6点が確認されている。第1～3類は表面上よく似た素弁8葉蓮華紋軒丸瓦あるが、大きさや蓮子の位置などから同紋異笵であることが明らかになっている。第4類はこの地域に限定される特異な単弁10葉蓮華紋軒丸瓦である。「棒状子葉」と称する細い子葉をもつことが大きな特徴の瓦である。第1～4類はいずれも小破片であり、細かな観察が及ばない点があるが、現時点での問題点等について簡単に記しておきたい。

素弁8葉蓮華紋軒丸瓦にはいくつかの特徴があり、畿内や朝鮮半島の寺院との関連性を窺わせるものがある。瓦当紋様は奈良県飛鳥寺の「花組」や素弁8葉の瓦が多い百済地域の東南里寺跡・旧校里寺跡などから出土する軒丸瓦に類似している。畿内での素弁8葉は飛鳥寺や柏原市衣縫廃寺例が該当するが、瓦当や中房の大きさ、蓮子の数などで瓦当の小さい寺谷廃寺のものとは異なる。瓦当紋様だけでは百済との関連性が捉えられそうであるが、紋様形態の相違のみをもってその伝播として検証するには未だ難しい面もある。さらに、3点しか確認されていない軒丸瓦がいずれも異笵であるということはこの寺の伽藍構成を考える上でも重要な要素の一つになっていくものとみられる。

一方、製作技法では瓦当裏面の調整が外周を低く、内側を高くナデることや丸瓦との接合の際に丸瓦広端両面を削ることなど飛鳥寺「星組」や「花組」の要素がみられる。百済の軒丸瓦でも東南里寺跡例などは丸瓦の接合方法や瓦当裏面の調整にも類似点があるなど共通している要素も多い。また、寺谷廃寺の素弁軒丸瓦に伴うとみられる丸瓦・平瓦は薄手で、飛鳥寺をはじめとする「星組」の系統に通じる製作技法もみられた。

このように寺谷廃寺の軒丸瓦には飛鳥寺や朝鮮半島の瓦づくりの技術が多くみられ、寺づくり・瓦づくりにあたってこれらの地域と強い繋がりをもった氏族が存在したものと推測される。しかし、現状ではこれらの瓦づくりの技術が朝鮮半島から直接入ってきたか、日本国内から伝播したかを決定する材料は未だ不十分であり、今後の課題としておきたい。

単弁10葉蓮華紋軒丸瓦は、比企郡周辺で出土している「棒状子葉」と称する弁央に羽子板状の細い子葉を配置する瓦である。この「棒状子葉」には8・10・12葉があり、8・12葉は坂戸市勝呂廃寺、鳩山町小用廃寺、同赤沼古代瓦窯跡、10葉は東松山市大谷瓦窯跡、寺谷廃寺で出土している。寺谷廃寺と大谷瓦窯跡の軒丸瓦の同笵関係は不明であるが、勝呂廃寺・小用廃寺と赤沼古代瓦窯跡の瓦は同笵である。その年代については、赤沼古代瓦窯跡で出土した須恵器との共伴関係から7世紀第4四半期と推定される。また、軒丸瓦の系譜については、素弁から派生したとする考え方と単弁から派生したとする考え方がある。

軒平瓦

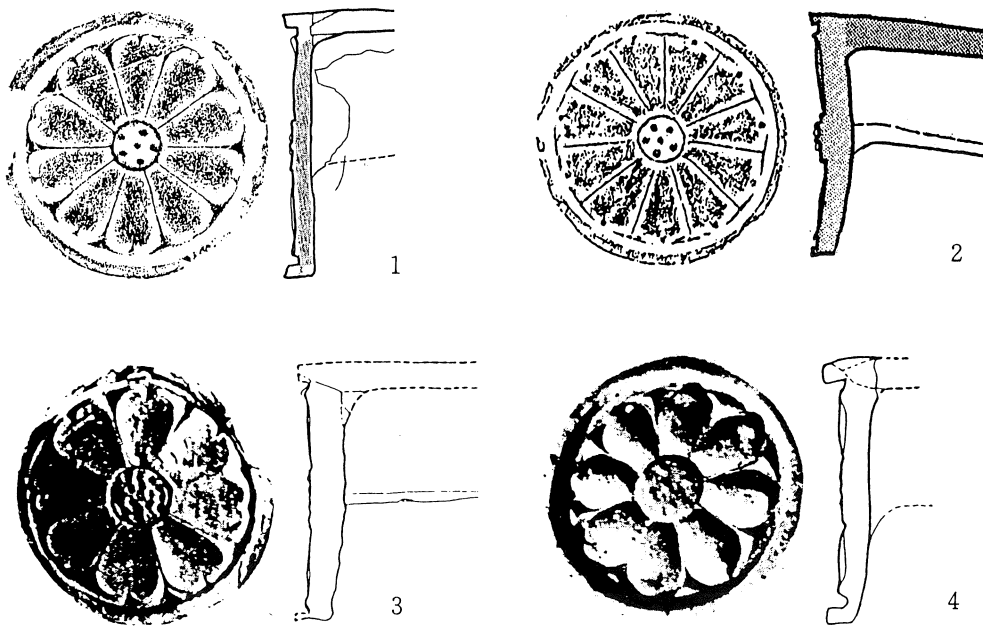
軒平瓦は平谷窯跡を含めて2種類7点が出土している。一部の軒平瓦は胎土から見ると単弁10葉蓮華紋軒丸瓦と組み合う可能性がある。

第1類とした寺谷廃寺出土の軒平瓦は、焼成や胎土からさらに分類が可能であるが、弧の形態が極めて類似しており、本稿では同一種として掲載した。型挽三重弧紋の弧線は、浅く緩やかに挽かれ、弧線に膨らみをもつのが特徴である。第1類の中では色調、胎土の異なるものがみられた。8・

9（第5図）は暗褐色で、他は淡褐色である。胎土も8・9は「棒状子葉」軒丸瓦や厚手の丸瓦・平瓦と共通している。また、軒平瓦の中には顎の部分が剝離した状態で採集されたものがあり、特に淡褐色をした瓦（第5図10～12）にみられた。剝離した顎の長さは4.5～5.5cmで、顎面と裏面はヘラで調整される。また、接合する平瓦の厚さはいずれも2cm前後と推定され、薄手と厚手と分類した平瓦の中間的な数値にあたることや色調などから、これらは「棒状子葉」とは組み合わない可能性もある。

平谷窯跡出土の三重弧紋軒平瓦は、ヘラ描きであるか型挽きであるかは確認できなかった。第1類と同様に顎の部分が剝離しているが、作り方などから年代的にほぼ同時期かそれ以降と推定される。三重弧紋の弧線はやや深く、第1類とは異なっている。平瓦部は厚手の平瓦が使用され、凸面は格子叩きでナデ消しはみられないことから明らかに後出的である。

武蔵国内で最初に重弧紋軒平瓦が出現するのは7世紀第4四半期頃で、上野国や下総国に比べて遅れて出現する傾向にある。北武蔵（埼玉県）では寺谷廃寺の三重弧紋が最初である。しかし、7世紀第4四半期に建立された勝呂廃寺では格子紋軒平瓦が採用されている。現時点では7世紀代の軒平瓦は資料的に極めて少なく、比較材料としては乏しい点も否めない。



第20図　素弁軒丸瓦

4　丸瓦・平瓦について

丸瓦　第６図13～21は丸瓦である。13に見られるように斜格子叩きの後丁寧なナデ消しを施し、側端部を削り込む、薄手のつくりと、14に見られる厚手のナデ調整のつくりとが存在する。また、丸瓦はいずれも行基式と推定される。

平瓦　Ａ地点を中心に採集した厚手の平瓦（Ａタイプ）と、Ｂ地点を中心に採集した薄手の平瓦（Ｂタイプ）とに大別できる。Ｂタイプの製作技法を推定すると、糸で切り離した粘土板をあらかじめ布を巻いた桶に巻きつけ叩きを施す。次に、桶をはずし、目印としてつけた分割突起に合わせ４分割に切ると推定される。切った瓦を成形台に載せ凸面の叩きを丁寧にナデ消す。さらに、凹面の枠板の段差をナデ消す。側面の割ばなしの部分を丁寧に縦方向の削り調整を施す。以上のような工程が復元できる。Ａタイプの製作技法を推定すると、糸きりによって切り離した粘土板をあらかじめ布を巻いた桶に巻きつけ叩きを施す。桶をはずし、４分割に切ると推定される。切った瓦を成形台に載せ凹面の枠板の段差をナデ消す。側面は、１～３回程度の縦方向の削り調整を施す。Ａ・Ｂタイプの両者に認められる特徴は叩き具が多種認められることである。いずれも、小片であるため分類の見極めが不充分なものもあるが、以上の特徴について検討する。

平瓦は凸面の調整により20種類に分類した。第22･23図に示したとおりである。格子叩きは１～15類とし、このうち、１～６類は叩きをナデ消している。また、ナデ消しとしたものは叩きが消されているため叩きの種類を特定できなかったものである。７～15類は叩いたままのものである。このほか、ケズリ調整のものと横ハケ調整を施すものである。

分類

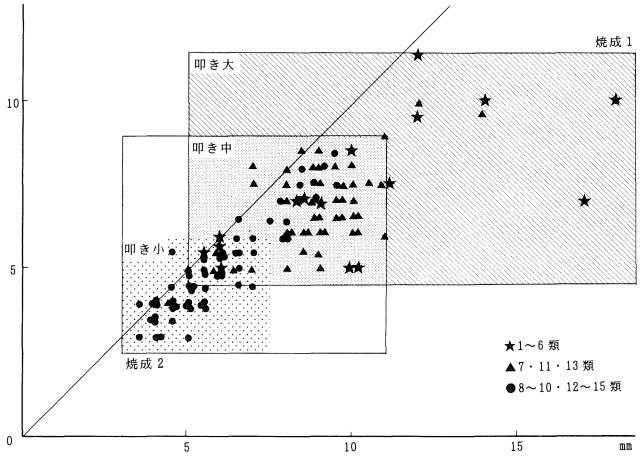
ナデ調整（第７・８図22～44）

掲載した149点中23点が該当する。凸面は叩きを施した後、丁寧にナデを施している。このため叩きが残らず、ナデ調整としたがナデ消しと同種である。凹面は布目の後、ナデもしくはヘラナデが施されている。焼成は良好なものが多い。22は凹面に糸きり痕は明瞭に残る。23～28・30～31・34・36～38・40・42には側面に丁寧な縦ケズリを細かく施し、薄く整形する。24・26・30・は模骨痕を縦方向にナデ消している。

ナデ消し（第９･11図45･78）

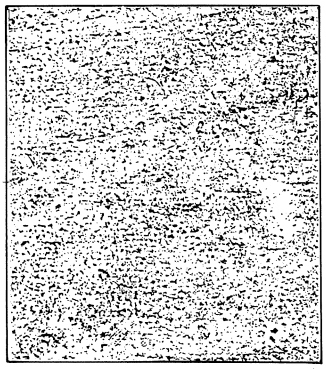
掲載した149点中34点が該当する。凸面は叩いた後、全体をナデ消しているが、器面の凹凸などにより叩きの痕跡わずかに残る。叩きの種類は明瞭につかむことができず総じてナデ消しとした。

大きさ	大型	中　型	小　型
斜格子＋ナデ消し	１類	２・４・５類	３・６類
正格子		７類	８・９・10・12類
斜格子		11・13類	14類



第21図　平瓦叩き分類

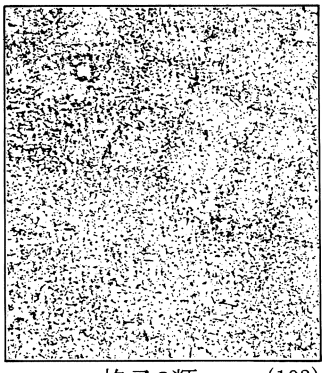
S＝1/1



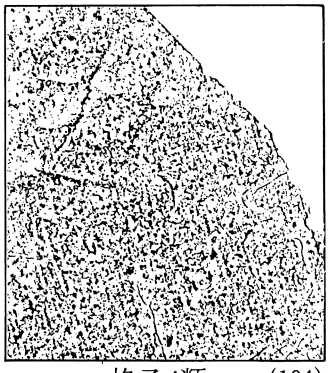
ナデ消し (74)

格子1類 (86)

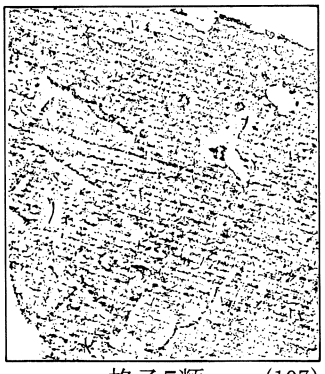
格子2類 (96)



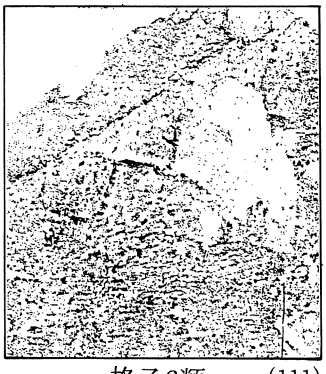
格子3類 (103)



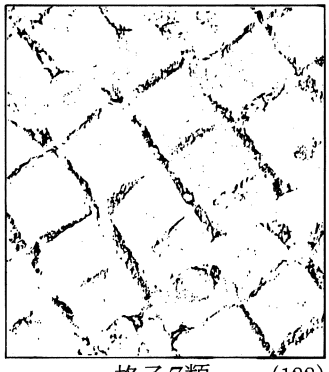
格子4類 (104)



格子5類 (107)

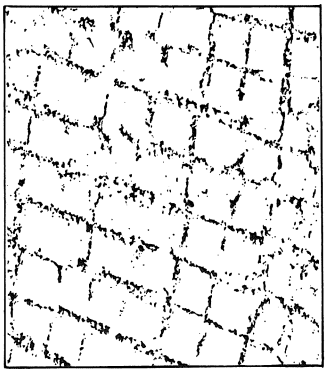


格子6類 (111)

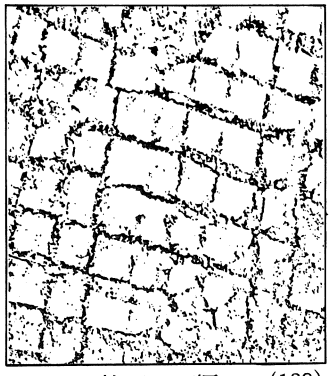


格子7類 (122)

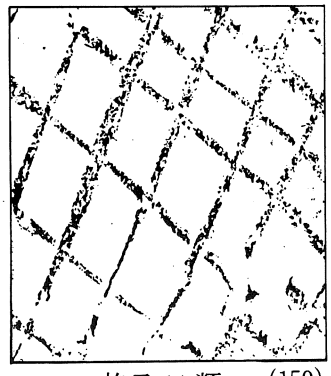
格子8類 (132)



格子9類



格子 10 類 (139)



格子 11 類 (150)

第22図　調整分類図 1

焼成は良好なものがほとんどである。側面の調整は前述したように、48は、細かなケズリ調整、49は、幅の狭いケズリ調整とが存在する。

ヘラナデ（第11図79～84）

掲載した149点中６点が該当する。凸面はヘラ状工具で全体をナデている。凹面は布目にナデが施されている。１点ヘラナデがある。焼成は良好なものがほとんどである。

格子１類（第12図85～95）

掲載した149点中11点が該当する。青木分類の格子Ａ型に該当する。比較的大きな斜格子である。縦1.4～1.2cm、横1.1cm前後の大きさである。凸面はいずれも全体にナデ消しを施すが、部分的に叩きが残っている。凹面は布目の後、ナデが施されている。１点ヘラナデがある。焼成は良好である。85・89の側面には分割突起とみられる縦方向の段が認められる。

格子２類（第13図96～101）

掲載した149点中６点が該当する。青木分類の格子Ｂ型に該当する。縦2.0cm、横1.7cmの大きな斜格子に斜め60度前後の線を１cm間隔に平行に数本加えた叩きである。凸面はいずれも全体にナデ消しを施すが、部分的に叩きが残っている。凹面は布目の後、ナデが施されている。部分的に三角形が見え、小さな格子にも見えるが、三方向からの彫り込みをもつ叩き具を使用していると考えられる。焼成は良好である。

格子３類（第13図102・103）

掲載した149点中２点が該当する。縦0.6cm、横0.6cmの正格子叩きを施す。凸面はいずれも全体にナデ消しを施すが、部分的に叩きが残っている。凹面は布目の後、ナデが施されている。凹面は布目にナデが施されている。焼成は良好である。

格子４類（第13図104・105）

掲載した149点中２点が該当する。縦1.1cm、横0.8cmの斜格子叩きを施す。斜格子の彫り込みは非常に細くシャープである。凸面はいずれも全体にナデ消しを施すが、部分的に叩きが残っている。凹面は布目の後、ナデが施されている。焼成は良好である。

格子５類（第14図106～110）

掲載した149点中５点が該当する。縦0.6cm、横0.6cmの正格子である。第３類はナデ消しの影響によるものか不明であるが、叩きの彫り込みの線が太い。本類は線が非常に細い。凸面はいずれも全体にナデ消しを施すが、部分的に叩きが残っている。凹面は布目の後、ナデが施されている。１点ヘラナデがある。焼成は良好である。

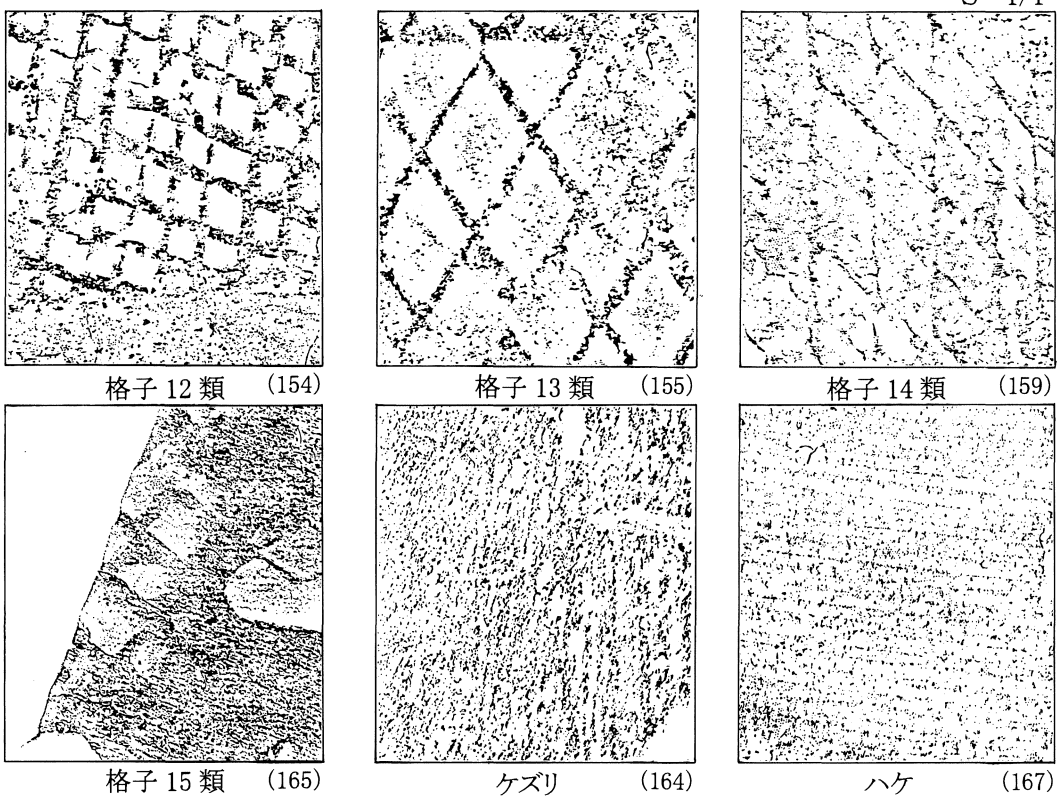
格子６類（第14図111～113）

掲載した149点中３点が該当する。縦0.6cm、横0.6cmの正格子に近い斜格子叩きである。凸面はいずれも全体にナデ消しを施すが、部分的に叩きが残っている。凹面も布目の上に、ナデが施されている場合がある。焼成は良好である。３・５・６類はほぼ格子の大きさが類似していることから同一の叩き具による部位の違いの可能性も考えられる。

格子７類（第14・15図114～130）

掲載した149点中17点が該当する。７類から14類は叩きが明瞭に残り、ナデ消しは認められない。

S＝1/1



第23図　調整分類図 2

第 4 表　平瓦凸面調整分類表

(片)

	ナ　デ	ナデ消し	ヘラナデ	1　類	2　類	3　類	4　類	5　類	6　類	7　類	8　類
掲載遺物	23	34	6	11	6	2	2	5	3	17	4
未掲載遺物	163	172	16	4	5	5	1	2	4	26	17
計	186	206	22	15	11	7	3	7	7	43	21

9　類	10　類	11　類	12　類	13　類	14　類	15　類	ケズリ	ハ　ケ	格　子	不　明	合　計
1	8	10	1	4	5	2	1	4	0	0	149
4	43	12	4	1	15	0	0	48	25	12	579
5	51	22	5	5	20	2	1	52	25	12	728

凸面に縦1.4～0.8cm、横0.95～0.6cmの大きい正格子叩きである。凹面は布目の上に、ナデが施されている。焼成は普通である。

格子 8 類（第16図131～134）

掲載した149点中 4 点が該当する。凸面は縦0.65～0.45cm、横0.55～0.45cmの小さく細長い斜格子である。凹面は布目の後、ナデが施されている。焼成は普通である。

格子 9 類（第16図135）

掲載した149点中 1 点が該当する。凸面は縦0.4cm、横0.35cmの小さい斜格子である。凹面は布目がみえる。焼成は不良である。

格子10類（第16図136～143）

掲載した149点中８点が該当する。凸面は縦0.6～0.4cm、横0.5～0.4cmの小さい斜格子である。凹面は布目の上に、ナデが施されている。焼成は普通である。

格子11類（第17図144～153）

掲載した149点中10点が該当する。凸面は縦1.0cm、横0.6cmの大きく細長い斜格子である。凹面は布目の後、ナデが施されている。１点ヘラナデがある。焼成は普通である。

格子12類（第18図154）

掲載した149点中１点が該当する。凸面は縦0.5cm、横0.4cmの小さい斜格子である。10類に近似する。凹面は布目の後、ナデが施されている。焼成は普通である。

格子13類（第18図155～158）

掲載した149点中４点が該当する。凸面は縦1.2cm、横1.0cmの大きく細長い斜格子である。凹面は布目の後、ヘラナデが施されている。焼成は普通である。

格子14類（第18図159～163）

掲載した149点中５点が該当する。凸面は縦0.9～0.65cm、横0.8～0.6cmの斜格子で角度が非常に鋭角である。凹面は布目の後、ナデが施されている。焼成は普通である。

格子15類（第18図165～166）

掲載した149点中２点が該当する。凸面は縦0.8cm、横0.6cmの正格子に近い叩きである。ナデが施されている。凹面は布目の後、ナデが施されている。焼成は良好である。

ケズリ（第18図164）

掲載した149点中１点が該当する。凸面はヘラケズリされている。凹面も布目にヘラケズリが施されている。焼成は不良である。

ハケ（第19図165～170）

掲載した149点中４点が該当する。凸面はヨコハケを施す。刷毛状工具には目の細かいものとやや粗いものの２種類が確認できる。凹面は布目の後、ナデが施されている。焼成は不良である。

薄手の丸瓦・平瓦の特徴　丸瓦・平瓦には厚手と薄手の２種類がある。前述したようにＡ地点に厚手、Ｂ地点に薄手が主体的に分布する傾向がみられる。厚手は胎土などから大半が「棒状子葉」軒丸瓦、薄手は素弁軒丸瓦と組み合うものとみられ、各々その生産地や製作技法において相違がみられた。特に薄手の丸瓦・平瓦は、素弁軒丸瓦との組合せを考えると東国でも最古級であり、製作技法は興味深い。いずれも破片が小さく、観察面での誤認も懸念されるが、薄手の丸瓦・平瓦には以下のような特徴があげられる。

1　凸面の叩きは丸瓦・平瓦とも格子叩きで、約15種に分類される。一部分を除いて叩きは丁寧にナデて消している。叩きはやや不規則であるが、ナデで消されない部分は丸瓦では側面付近、平瓦では模骨と模骨の間付近に比較的残る傾向がみられる。一部の平瓦には異なる叩き具を複数用いている場合もみられた。

2　凹面は桶の模骨（枠板）の部分をナデて消している。指とヘラによる場合があり、指では模骨上を、ヘラでは殆どを消している場合が多い。

3　側面には分割突起の痕跡を部分的に残す場合がある。側面をヘラで調整した際、結果として残ったものと考えられる。

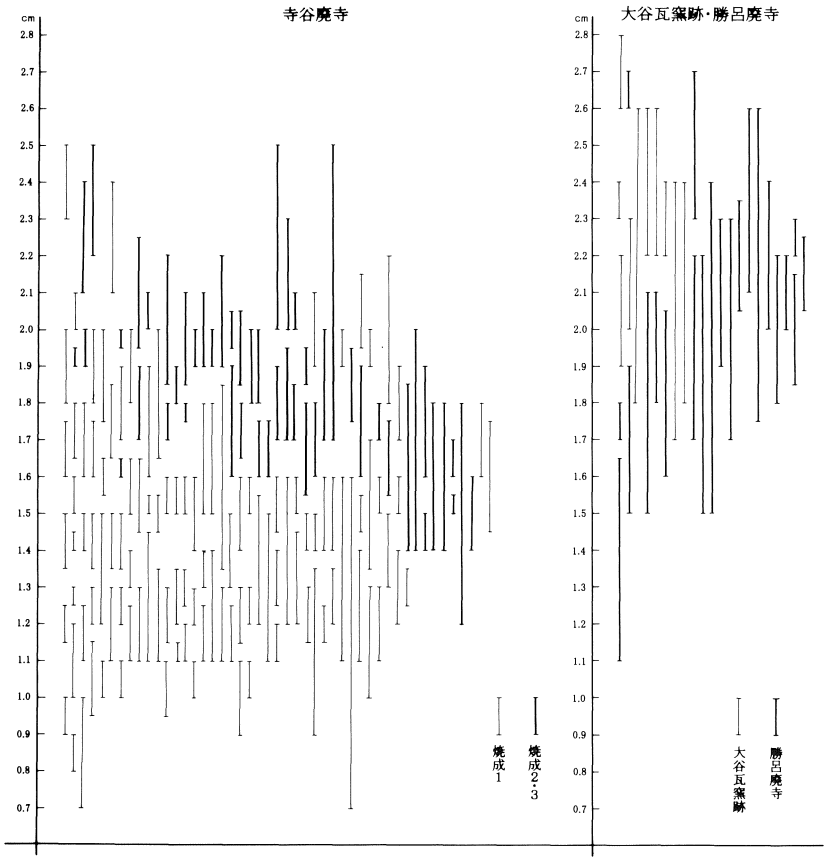
4　側面、端面とも細かいヘラ調整を行う。平瓦は桶から外した後、凹型台のような台に瓦を置いて広げ、簡単な調整を行った可能性がある。しかし、調整は、必ずしも、厚さを整えるものではなく、厚さが一定でないものが多い。

5　飛鳥寺「花組」にみられる淡褐色系の「赤瓦」の一群が多い。

6　桶の模骨（枠板）は相対的に幅が広いが、幅が狭くなるものもみられ、複数の桶が存在した可能性も考えられる。

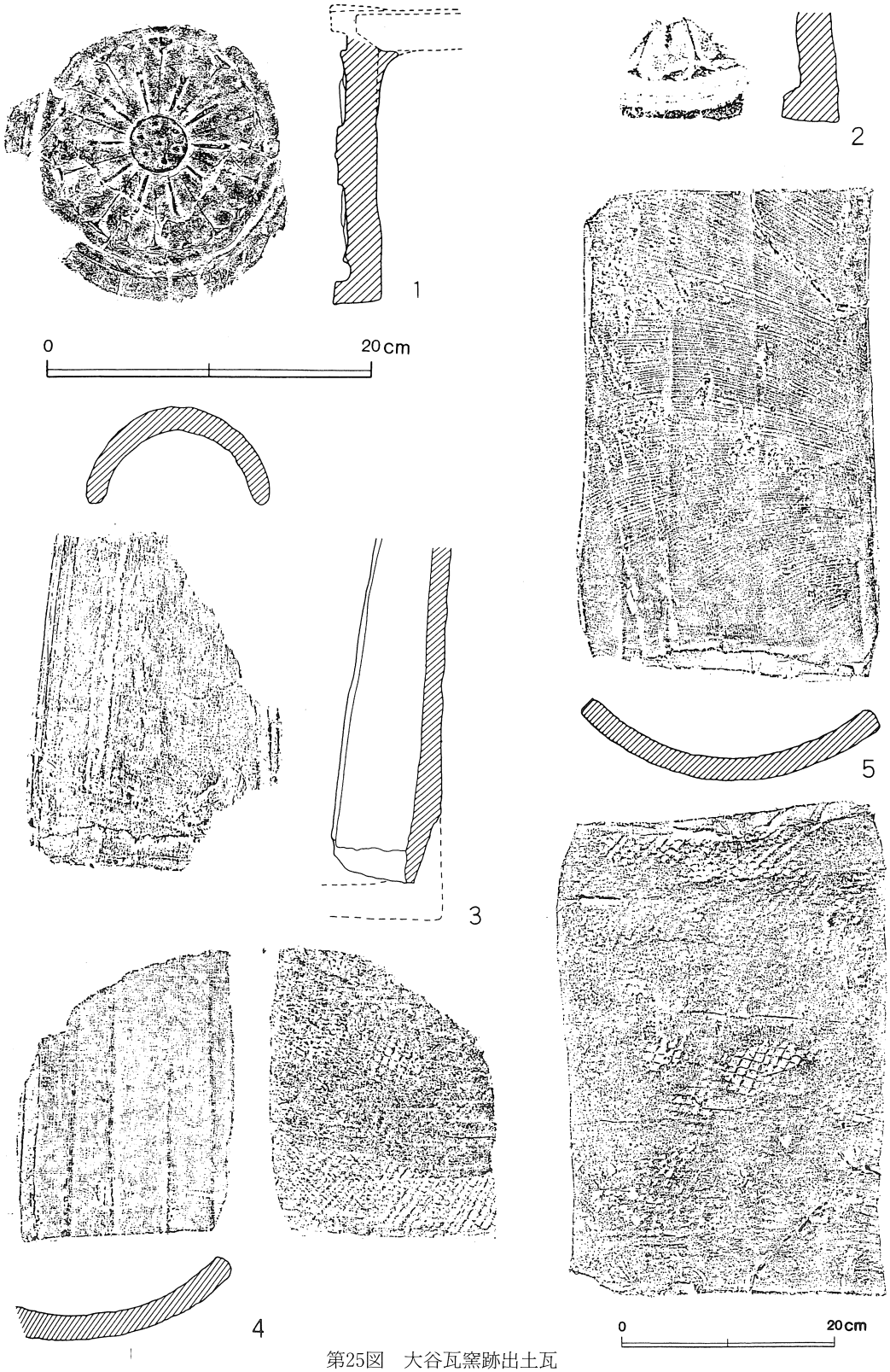
また、極少数ではあるが、成形した平瓦の寸法が短かったために粘土を足している瓦もみられた。この平瓦の場合、凹面はすべてヘラで布目を削り取っている。

平瓦の厚さの特徴　採集した平瓦の厚さについて検討を加えてみた。第24図に示した分布図は1枚の平瓦から厚さの最大値と最小値を出し、1本の線でその厚さの幅を表現したものである。細線は焼成1とした焼成の良好な堅致な瓦で、B地点を中心として採集した資料である。太線は焼成2・3とした焼成のやや悪い瓦でA地点を中心として採集した資料である。明らかに、焼成1は薄い。厚さの点でもA・B地点の瓦に明らかな違いが認められた。焼成1の瓦は総じて薄い傾向にある。しかも、一枚の瓦は0.7～1.6cmと幅を持つものも多く存在し、厚さが一定していないのも大きな特徴である。焼成2・3の瓦は厚く厚みに均一性をもつ。瓦工の技術的違いによるものと考えられる。

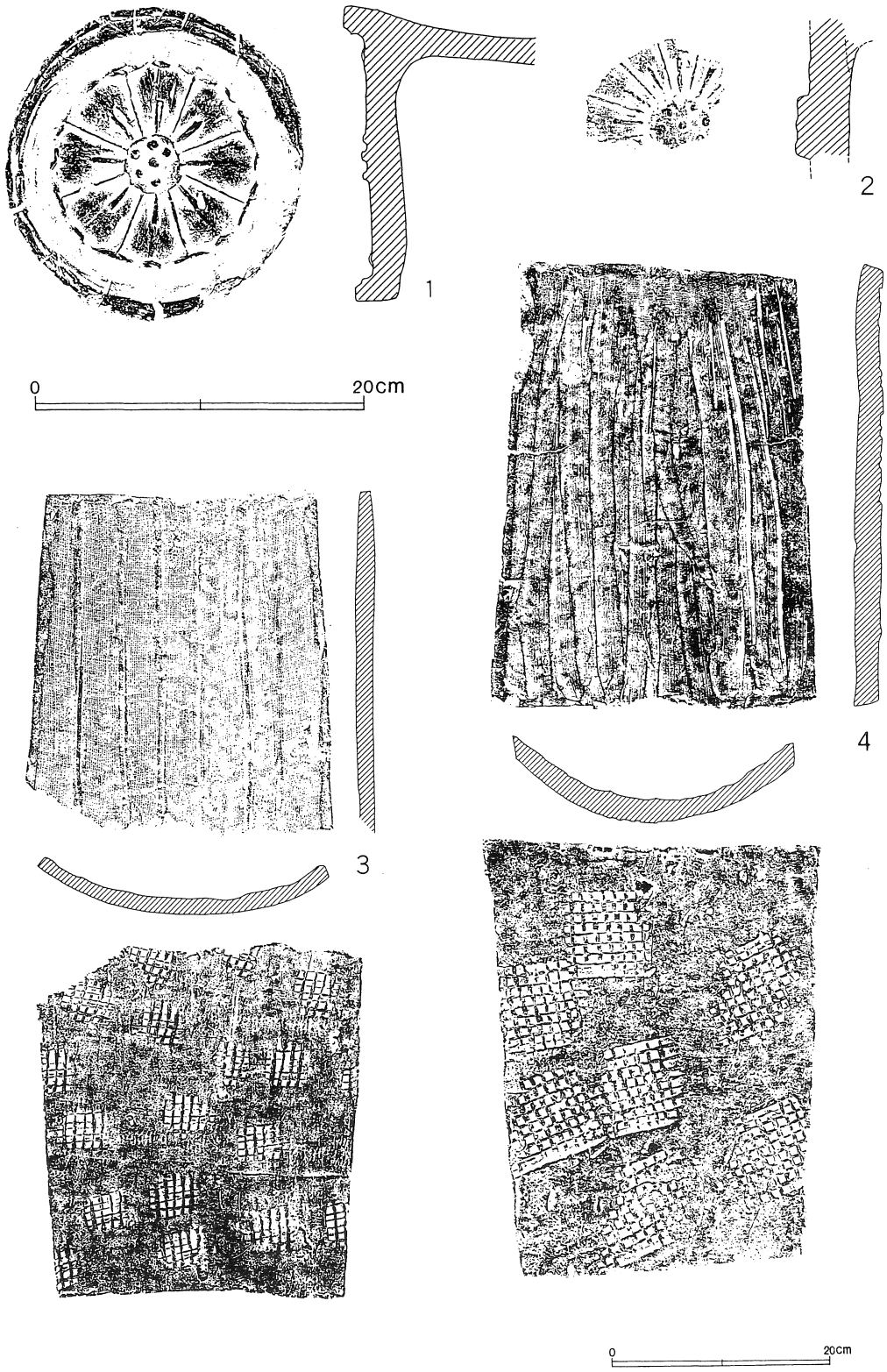


第24図　平瓦厚さ分布図

また、大谷瓦窯跡、勝呂廃寺の平瓦についても同様に計測したところ、寺谷廃寺よりも全体的に厚みがあることが窺えた。



第25図　大谷瓦窯跡出土瓦



第26図　勝呂廃寺出土瓦

ま と め

寺谷廃寺は、出土した素弁８葉蓮華紋軒丸瓦からその年代や系譜についてこれまで多くの議論がなされてきた。今回、新たな資料を加えて軒丸瓦や出土遺物の大半を占める平瓦の製作技法などから検討を行い、改めて創建瓦の系譜などについて考えてみた。

３種類ある素弁８葉蓮華紋軒丸瓦は、前述したように花弁端を桜花状に切り込むもので飛鳥寺でいう「花組」に属する。また、中房の蓮子は１＋４、弁数は８葉、弁の形状も盛り上がり、百済地域に多い弁の形態が採られている。軒丸瓦はいずれも破片であったが、残存する部位から笵種の相違や製作技法の一端も明らかになった。瓦当と丸瓦の接合技法は、「花組」にみられる丸瓦先端の両面を削って接合する方法が採られ、瓦当裏面の調整では百済地域や「星組」などにみられる中央部に膨らみをもたせる回転ナデのような痕跡を残すものがみられた。

現在、日本で百済様式の素弁蓮華紋軒丸瓦は畿内を中心に山陽地域の一部、東国では寺谷廃寺に分布することが確認されているが、多くは「星組」の系統で、「花組」の系統が出土する寺院は意外なほど少ない。８葉という弁数は、百済では素弁蓮華紋軒丸瓦の主流であるが、飛鳥寺の創建軒丸瓦は素弁10葉蓮華紋軒丸瓦（花組）と素弁11葉蓮華紋軒丸瓦（星組）で素弁8葉ではない。飛鳥寺にも素弁8葉蓮華紋軒丸瓦は１点確認されてはいるが、創建瓦の系統が7世紀前半代は引き続き生産されているようであり、中核的な瓦とは成り得なかったものとみられる。畿内では他に柏原市衣縫廃寺、船橋廃寺に素弁８葉蓮華文軒丸瓦が存在する。これらの軒丸瓦は同笵で、出土量の多い衣縫廃寺から船橋廃寺などに補完的な瓦として供給したものと考えられている。飛鳥寺や衣縫廃寺の素弁8葉蓮華紋軒丸瓦については量的に少なく、年代的な位置付けは難しい面がある。

最近になって、奈良県天理市願興寺跡の調査で、寺谷廃寺の素弁軒丸瓦によく似た無子葉単弁8葉蓮華紋軒丸瓦が出土している。花弁は桜花状の切り込みをもち、弁も膨らみがある。また、中房の蓮子は１＋４と推定され、瓦当の大きさも寺谷廃寺とほぼ同じであるなどの共通点も多い。しかし、全体に作りは粗く瓦当も厚く、周縁もやや高いなどの相違点もある。また、この軒丸瓦は胎土から三重弧紋軒平瓦と組み合わさる可能性が高い。現在、その年代については７世紀第2四半期頃と考えられている。寺谷廃寺の素弁８葉蓮華紋軒丸瓦と比較すると視覚的には新しい感がある。

また、Ａ地点で出土した棒状子葉をもつ単弁10葉蓮華紋軒丸瓦は、胎土や焼成から暗褐色をした三重弧紋軒平瓦と組み合うと考えられる。しかし、淡褐色の三重弧紋軒平瓦は胎土や焼成が異なり、同じような弧線ながらも異なる窯で生産された可能性もある。後者の三重弧紋軒平瓦は、色調などからも古く位置付けられる可能性を持っているが、年代的位置付けには問題が残る。今後、素弁８葉蓮華紋軒丸瓦の年代や系譜を考える上では、選択肢の一つとして視野に入れていく必要もあるだろう。

丸瓦・平瓦では瓦類全体の95％以上を占め、採集地点によって叩き具、調整方法、厚さなどの製作技法上での相違が窺われた。相対的にＡ地点の瓦類は厚く、側面・端面などの調整も簡潔で、凸面の叩きもそのまま留めているのが特徴である。Ｂ地点の瓦は薄いが、厚さが一定でないものが多かった。また、側面•端面の調整は入念に行い、叩きの大半をナデ消すのを大きな特徴としている。平瓦については検討の結果、Ａ地点は厚手で、格子叩きと横ハケを施した平瓦、Ｂ地点は薄手で、

格子叩きを丁寧にナデ消し、側面を丁寧に削り込んだ平瓦で占められていたことが明らかになった。叩き具については、いずれも格子叩きを多様化させたもので正格子と斜格子がある。飛鳥寺にみられるような平行叩き、縄叩きの存在は1点も確認できなかった。また、B地点を中心としたナデ消しを施す平瓦の叩き具は斜格子で、大（1.2～1.7cm）・中（0.7～1.2cm）・小（0.7cm以下）の大きさが認められた。A地点を中心として出土する平瓦の叩き具は正格子と斜格子で、中（1.0cm前後）・小（0.7cm以下）が認められた。このようにA地点とB地点では成形や調整、叩き具の大きさなどに違いが認められ、時期的な差とともに異なる工人集団の存在が指摘できる。また、胎土から厚手の平瓦が単弁10葉蓮華紋軒丸瓦や一部の三重弧紋軒平瓦と組み合うと考えられることから相対的にはB地点の瓦が古く、A地点の瓦が新しいことも明らかとなった。

B地点のような製作技法をもつ平瓦は、奈良県生駒郡三郷田勢野の辻ノ垣内窯に類例がある。軒丸瓦は確認されなかったが、7世紀前半頃の須恵器とともに平瓦が窯体内から検出されている。辻ノ垣内窯の平瓦は、糸切り痕から粘土板桶巻作りと考えられる。凹面は模骨痕を部分的にナデ消し、桶に巻きつけた布目の幅が短いためか布目が広端部まで届いていないものもみられた。また、凸面は丁寧にナデ消しを施しているため叩きは不明瞭であった。厚さは1.4cm前後と薄い。以上の点からも寺谷廃寺の平瓦との共通性は多いが、側面調整などでは、寺谷廃寺では細かい面取りをして一部分割突起を残す場合があるのに対して、辻ノ垣内窯では飛鳥寺と同じように分割突起を明瞭に残すなどの点で異なった面もみられる。このようにB地点における寺谷廃寺の平瓦には、格子叩きを丁寧にナデ消すなどの独自性の強い面も備えてはいるが、前述した軒丸瓦のように百済地域や畿内の製作技法の要素も混在している。

飛鳥時代における畿内の寺院では、堂塔などの建物によって屋瓦が異なる例が多くみられる。飛鳥寺では「花組」・「星組」などの複数の工人集団によって造瓦がなされてきた。これらの工人集団は継起的かつ交替的に造瓦を担い、しかも瓦製作技術の拡散と伝播は笵の移動とともに支えていたとも考えらている。寺谷廃寺のように畿内から遠く離れた東国に存在する寺院の場合はどうであろうか。周辺の古墳群の造営規模などをみても、畿内のような本格的な造瓦体制が組まれたとは考え難い。しかし、寺谷廃寺の瓦を見る限り、畿内や百済地域との関連性を抜きにしては語れないのも事実である。想像を膨らませると寺谷廃寺を造営した氏族は、飛鳥寺の造瓦に関わった「花組」・「星組」や百済地域と深い繋がりを持っていたものと考えられる。また、周辺には調査の手が殆ど入っていないため不明な点が多いが、6世紀後半以降に小規模古墳群が多くなることや7世紀になって羽尾窯跡、平谷窯跡が相次いで構築されるなど、寺院が造営されるほどの基盤が急速に整えられていったと考えられる。

なお、寺谷廃寺の創建時期については、淡褐色に焼成された三重弧紋軒平瓦が願興寺のように素弁軒丸瓦と組み合うかが今後焦点の一つとなるだろう。しかし、現時点では素弁8葉蓮華紋軒丸瓦との組み合わせは、軒平瓦の叩き具が薄手の平瓦のものであるか、厚手の平瓦のものであるかなどが明らかにされない限り難しいと考えられる。したがって、創建瓦は素弁8葉蓮華紋軒丸瓦と薄手の丸瓦・平瓦で構成されていた可能性が高く、創建年代についてはこれまでの検討結果から7世紀前半と考えられる。

付記

本稿をまとめるにあたり、青木忠雄、高橋史朗両氏には、資料の借用ならびに掲載のご承諾を頂いた。また、上原真人、大西貴夫、大脇潔、岡林孝作、亀田修一、清水昭博、花谷浩、村木誠、毛利光俊彦の諸氏ならびに滑川町教育委員会にはご教示・ご協力を頂いた。記して謝意を表する次第である。

引用・参考文献

青木　忠雄　1966「北武蔵における初期寺院覚書―滑川町寺谷廃寺跡の古瓦から―」『埼玉史談』第43巻第２号　埼玉県郷土文化会

赤熊　浩一　1997「関東における初期寺院について」『古代寺院の出現とその背景』第42回埋蔵文化財研究集会

上原　真人　1996『蓮華紋』日本の美術４　No.359　至文堂

上原　真人　1997『瓦を読む』　歴史発掘11　講談社

大脇　　潔　1994「飛鳥時代初期の同笵軒丸瓦―蘇我氏の寺を中心として」『古代』第97号　早稲田大学考古学会

岡林　孝作　1997「願興寺跡の発掘調査」『仏教藝術』第235号　毎日新聞社

岡本　東三　1996『東国の古代寺院と瓦』　吉川弘文館

酒井　清治　1987「窯・郡寺・郡家―勝呂廃寺の歴史的背景の検討」『埼玉の考古学』新人物往来社

高橋　一夫　1980「羽尾窯跡発掘調査報告書」　滑川村教育委員会

高橋　史朗　1996「武蔵国寺谷廃寺についての一考察―古瓦を中心として―」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会

高柳　　茂　1979「比企郡滑川村出土の須恵器と布目瓦」『埼玉考古』第18号　埼玉考古学会

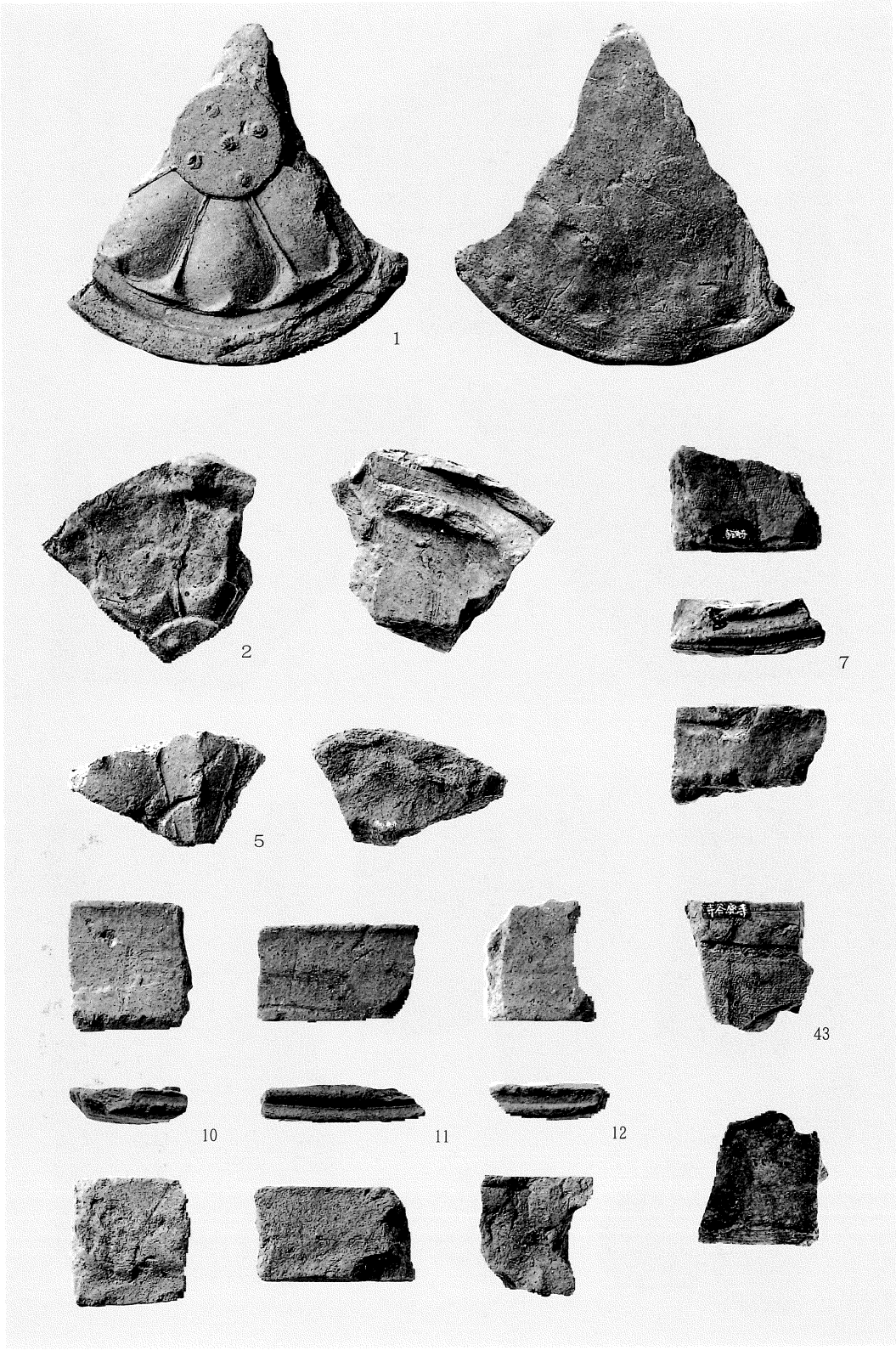
奈良国立文化財研究所　1998『飛鳥時代の瓦づくりⅠ』　第１回古代瓦研究会発表要旨

花谷　　浩　1993「寺の瓦作りと宮の瓦作り」『考古学研究』第40巻第２号　考古学研究会

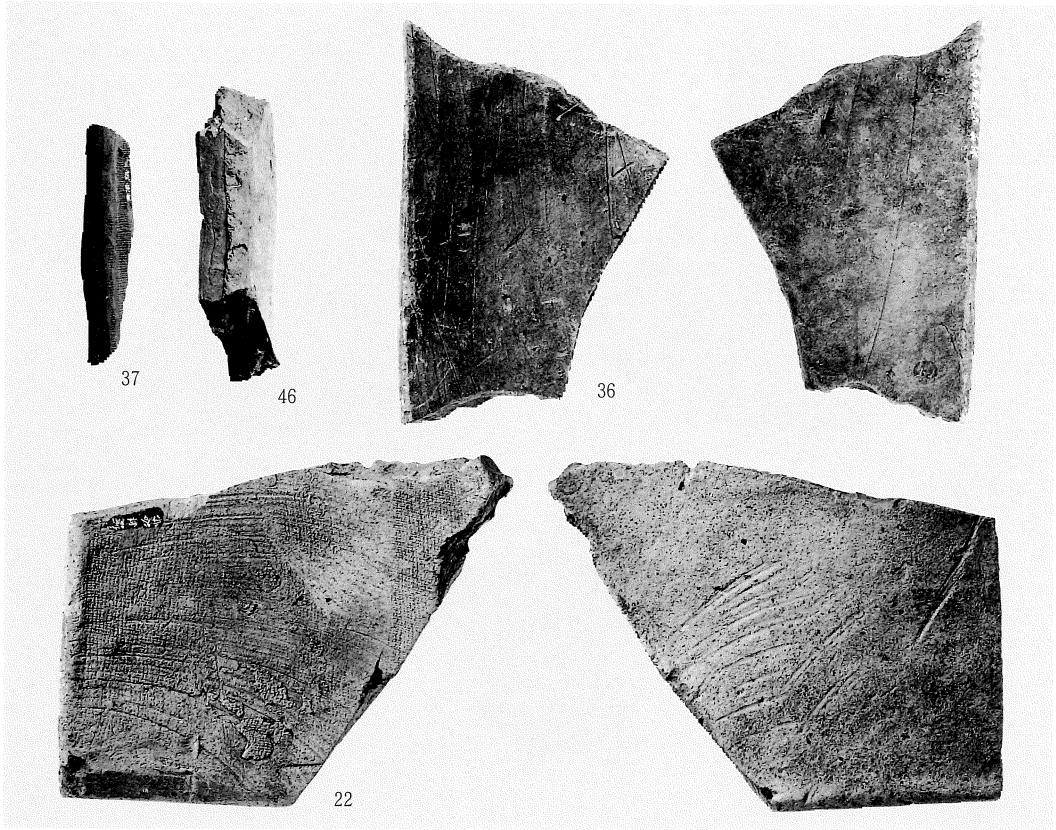
坂野　和信　1997「日本仏教導入期の特質と社会―その歴史的背景と変革について」『埼玉考古』第33号

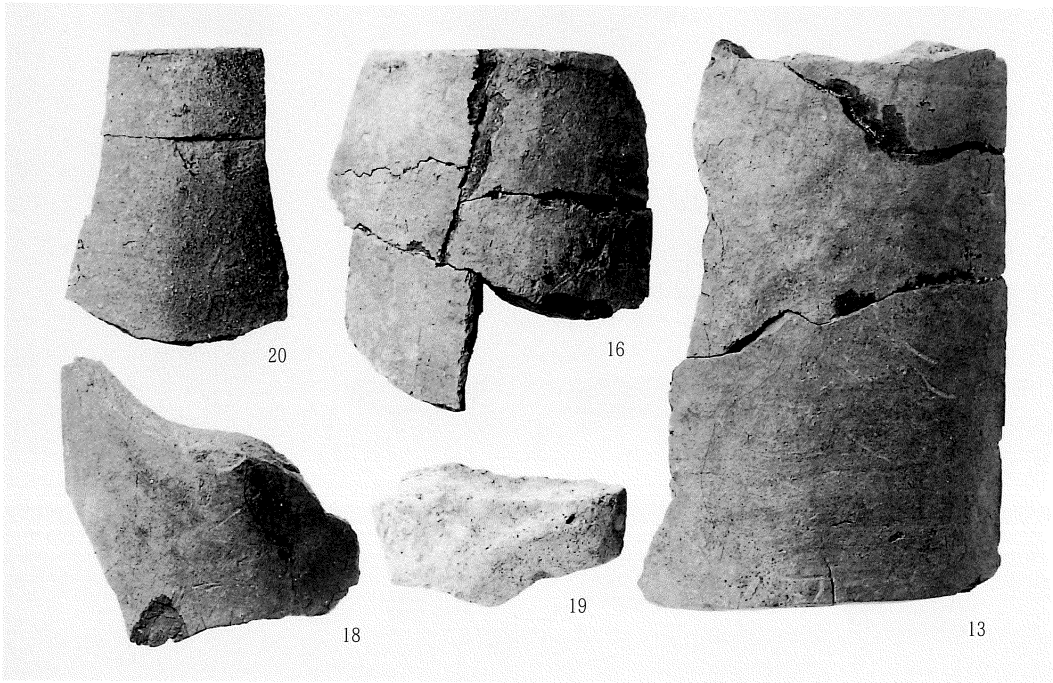
昼間　孝志　1997「武蔵国の初期寺院」『関東の初期寺院』　関東古瓦研究会

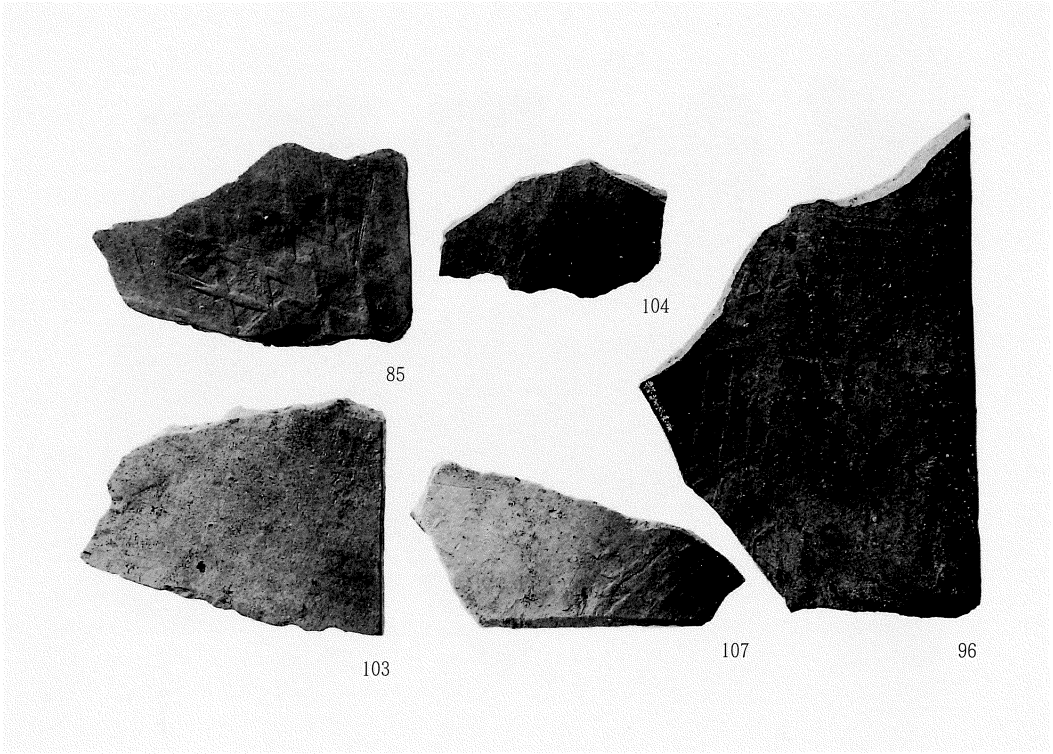
藤原　高志　1982「寺谷廃寺」『埼玉県古代寺院跡調査報告書』　埼玉県県史編纂室

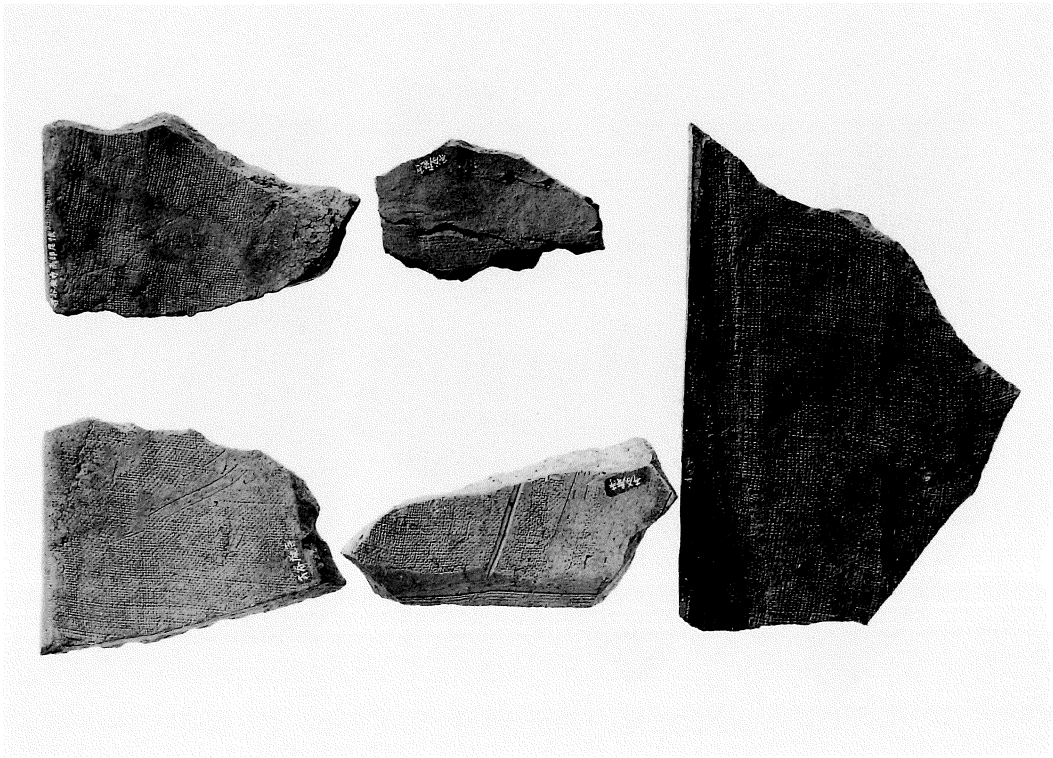

1
2
5
7
10
11
12
43

写真図版２

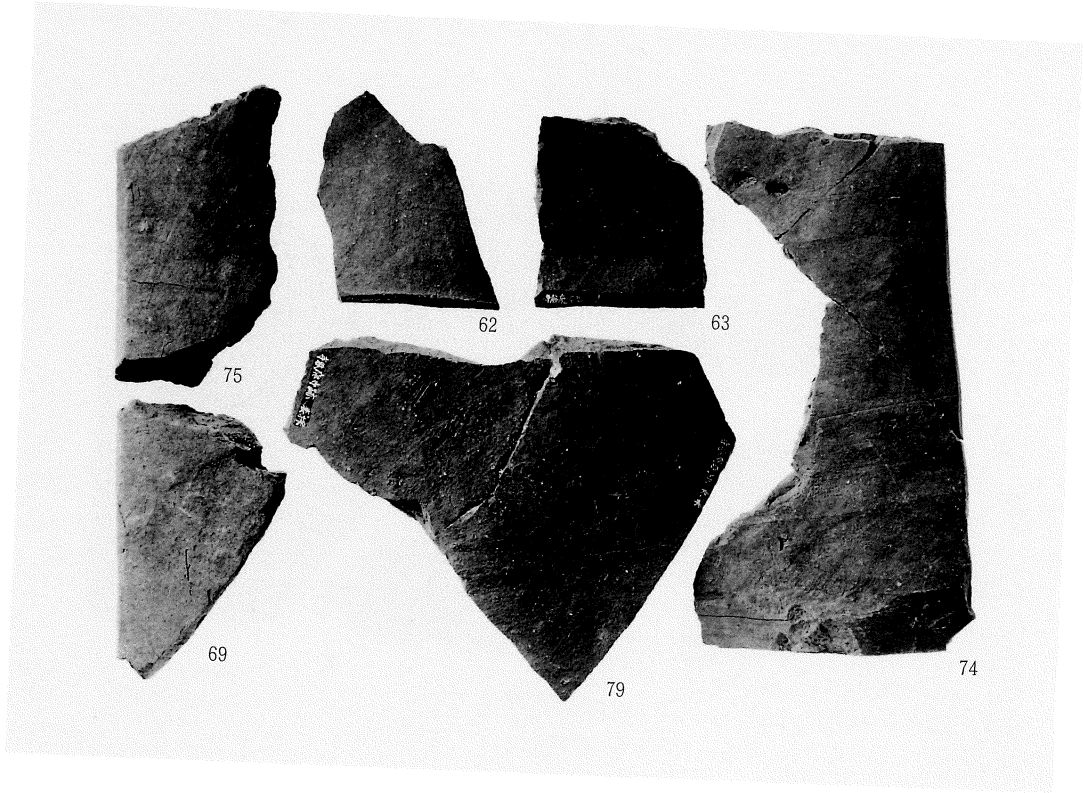


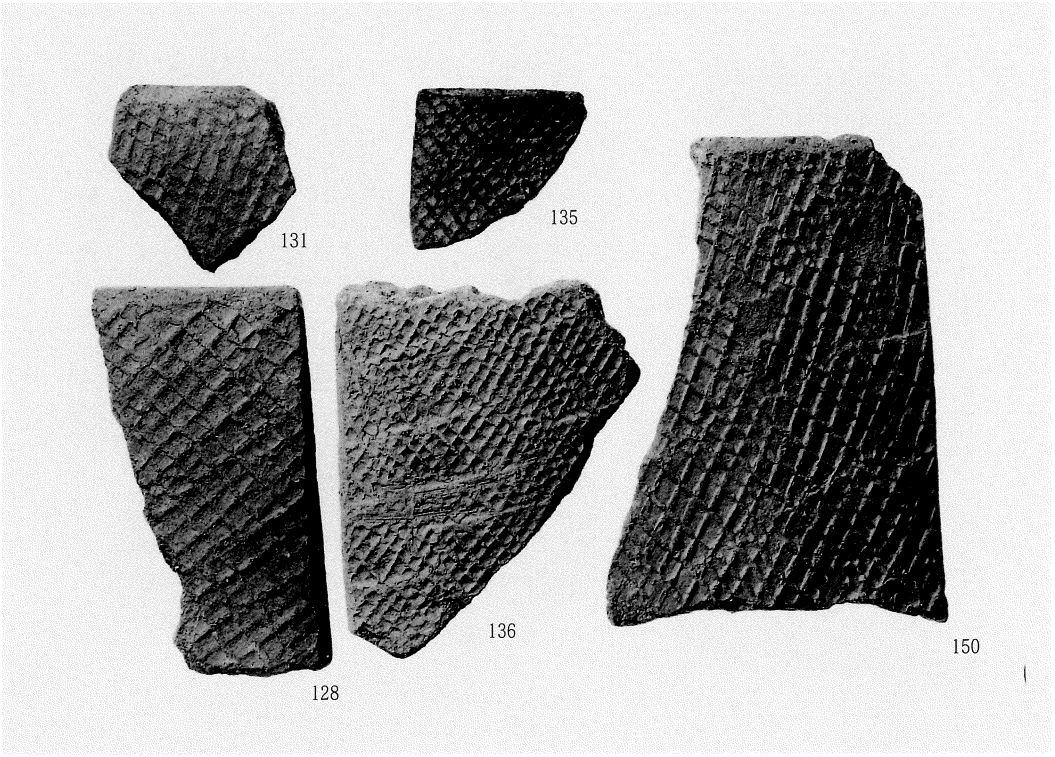


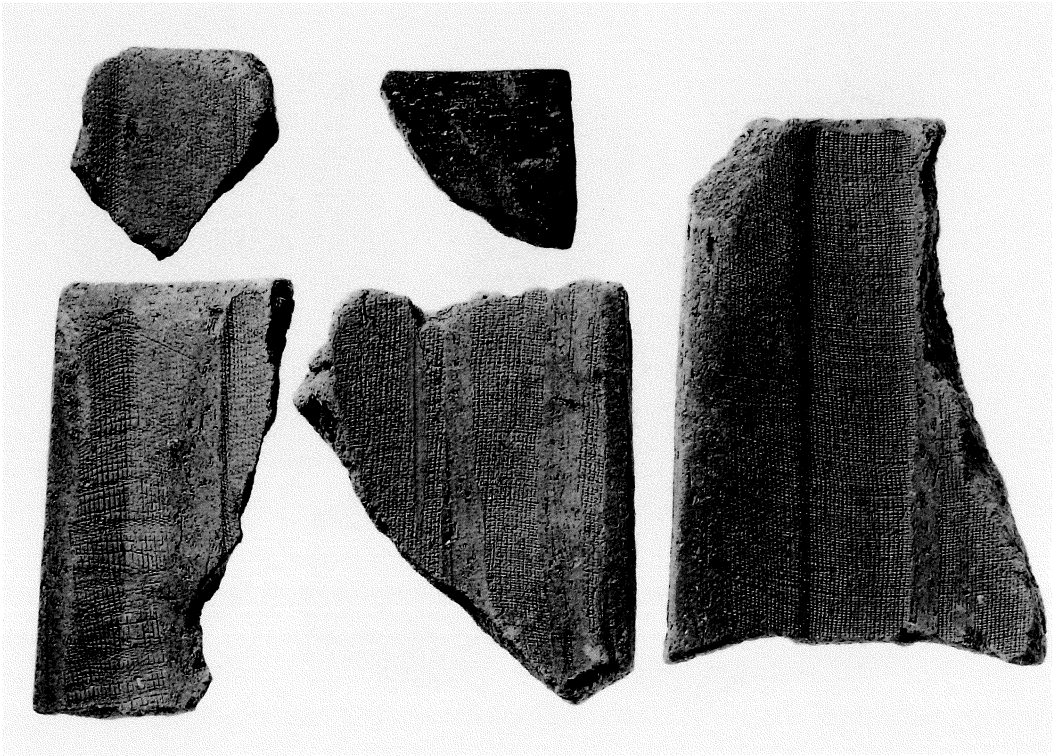

85
104
103
107
96

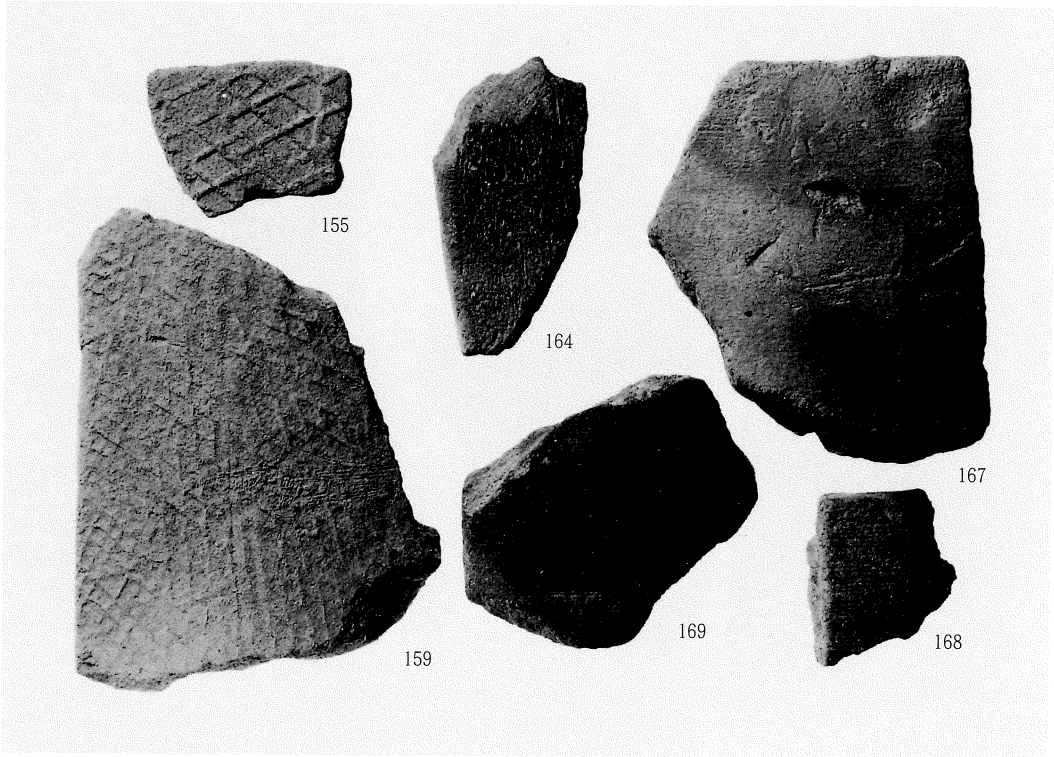


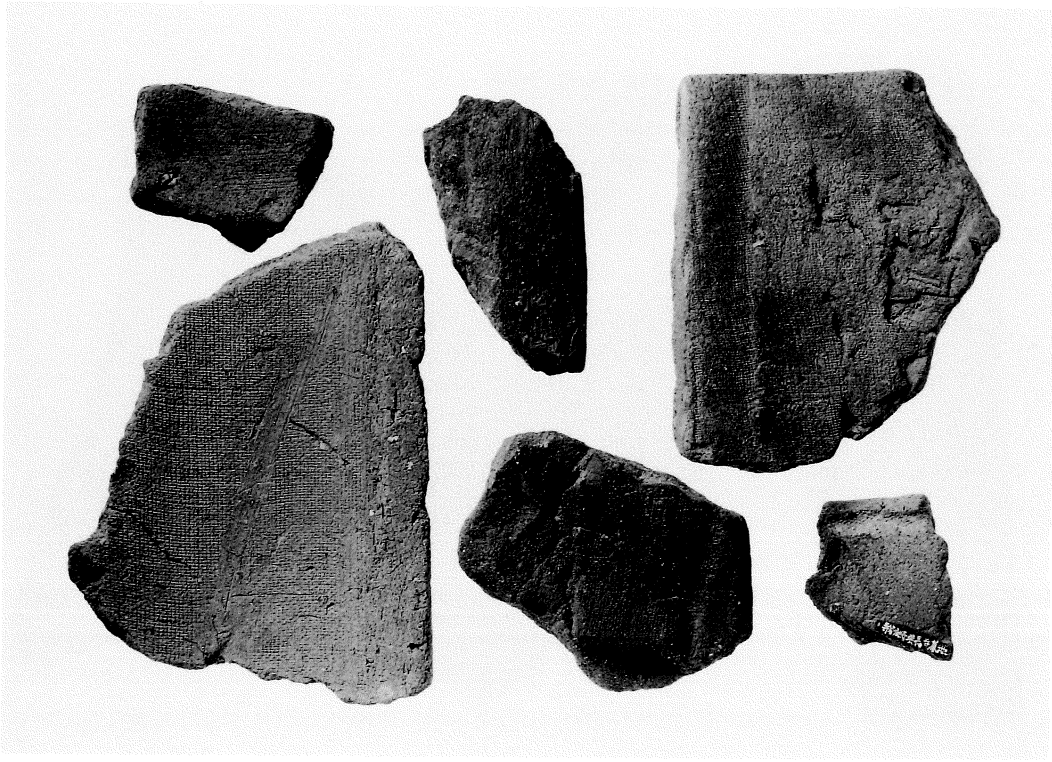
写真図版４




131
135
136
150
128




155
164
167
159
169
168



研究紀要 第15号

1999

平成11年3月25日　印刷

平成11年3月31日　発行

発　行　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108　大里郡大里村船木台4丁目4番地1

☎0493—39—3955

印　刷　朝日印刷工業株式会社